第３章　米子城の調査成果

第１節　米子城の自然環境調査

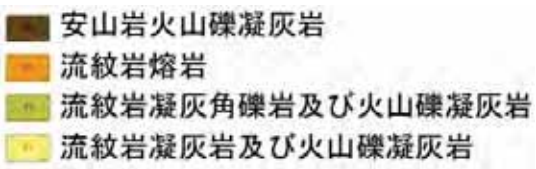
１地形・地質

（１）米子城跡の地形・地質

米子城跡は、米子市街地の西側、加茂町から西町にかけて所在し、中海に面する湊山及び飯山に位置する。湊山は標高 90.1ｍで、地形的には米子平野と砂洲を取り囲む法勝寺丘陵性山地の西端が湊山にあたり、山の北側は流紋岩、南西側は安山岩で形成されている。丘陵先端部の中海に張り出した山頂に築かれた天守は、水運の要衝を占地して、城下を一望できる。

飯山は湊山の東にある標高約 50ｍの山で、流紋岩からなる。かつては高温石英や低温石英（水晶）を産出した。明治 36 年(1903)刊行の『米子みやげ』には米子の名高きものとして水晶が挙げられており、「飯山の南麓及び勝田神社の後山より出づ」とされている。

米子城跡周辺の地質図



（２）米子城の石垣の岩石

米子城の石垣に使用されている多量の石材がどこから切り出されたものであるのか、正確な資料は残っていない。

石垣の岩石の種類を調べてみると、第三紀の凝灰角礫岩・安山岩・石英安山岩・流紋岩が多く用いられている。

湊山の山体の大部分は、風化の著しい米子流紋岩からなっており、石材としてはあまり適していない。湊山の南部には米子流紋岩に貫入した安山岩が分布しているが、この岩石は風化を受けておらず、石材として適している。

石材採掘跡の窪地

城山を深浦側から登っていくと、途中に石材採掘跡の大きな窪地がある。周囲の岩石は米子流紋岩であるが、岩脈状に入っている安山岩を採堀した結果、大きな窪地が生じたと考えられる。

石垣に比較的多く用いられている流紋岩は、米子流紋岩層から切り出されたものである。この流紋岩は風化が進んでおらず新鮮で、湊山中学校裏の山に露頭を求めることができる。また、凝灰角礫岩は、いわゆる第三紀の火山変動によって形成されたグリーンタフと呼ばれるもので、米子市周辺に広く分布している。この凝灰角礫岩は加工が容易で、思うように整形することができるので、凝灰角礫岩が積み上げられた石垣は整然としている。また、石英安山岩は新加茂川の対岸に分布する。距離が近いことから考えて、ここから切り出された可能性が高い。

２植生

城跡の植生については、立地上スダジイを優占とする照葉樹林が発達している。特色としては、シイ、カシの照葉樹林の極相林として自然度の高い森である。市内のほかのスダジイ林と異なる点は、高木・亜高木にカゴノキが多く見られることと、低木にアリドオシ属のコバノニセジュズネノキが見られることである。このコバノニセジュズネノキ・カゴノキ等の樹木は、中海に面する山や神社の社叢を特徴づける木である。湊山南西や北東側に群落を形成しているヤブツバキは湊山を代表する花で、北東側斜面に自生するヤブツバキは巨樹も多い。

起伏の多い地形のため植生は単純ではなく、各斜面によって構成種に違いがあり、シラカシ林・タブノキ林・カゴノキ林が接しながら混成し、特に高木は北東側にカゴノキ、南西側にタブノキ、南東側にシラカシが多く見られる。一部にはカゴノキ・ムクノキ・カラスザンショウなどの樹種も加わり、多様な林相を保っている。

また、中海に面していることから、暖地要素のクロガネモチ・ヤマモモ・モッコク、海岸要素のヒメユズリハ・ヤブニッケイ・トベラ・マサキ、といった様々な要素を持った植物が生えていること、高木、亜高木にカゴノキが見られることも特徴的である。このうち、クロガネモチは島根県安来市十神山に自生が多い樹木であるが、米子以東では殆ど見られず、分布限界域を示す植物である。

このほか、人為的要素のイロハモミジ・ヤダケ等も認められる。その他、林内にはマンリョウ・カラタチバナ等が自生している。

なお、湊山公園入口には米子城築城時に植えられたといわれる潮止め松があり、市指定天然記念物

に指定されている。

過去の植生調査としては、平成５年(1993)に調査が行われ、海岸性と山岳性の植物が 404 種確認されている。

また、平成 25 年(2013)度には、天守付近の石垣から 15m程度の範囲の胸高直径 20cm 以上の樹木について、位置の特定と樹種名の調査を実施している。その後、米子城跡史跡整備事業に伴い、平成 27 年度、28 年度に植生調査が行われた。結果的には、平成５年以降植生に大きな変化はみられなかった。

このように、城跡は米子市街地中心部に位置しているにもかかわらず、多様な在来種が見られ、市域本来の暖温帯照葉樹林特有の植生を保持していることがわかる。

潮止め松（市指定天然記念物）

また、内膳丸では外来種が比較的多く確認できたが、これは、市街地側に張り出した地形から、種子が風等の要因で持ち込まれやすい環境であるためではないかと考えられる。

なお、平成 27 年(2015)度の調査において、園路付近など、草刈が定期的に行われるところでは下草除去により、日照条件などの環境が変化した結果、幼木や、貴重種などが確認できた。これは藪などの環境では確認できない個体が日照増加により生育可能となったからと思われる。この傾向は、二の丸表中御門付近や深浦側園路付近のウバユリの群生などに顕著にみられる。

二の丸表中御門付近のウバユリ

なお、江戸時代の絵図にはマツが主に描かれており、また明治 11 年(1878)頃の写真にも天守付近にはマツが生えている（第３章第２節３　写真 P87 参照)。

このことから、現在の植生は、廃城後明治以降に形成された植生であると考えられる。

米子城絵図に描かれたマツ

（『伯耆国米子城絵図』寛政５年(1793)１月 28 日　鳥取県立博物館蔵）

〈引用･参考文献〉

米子市教育立地計画　実態調査委員会編 1954『米子市実態調査』米子市教育委員会

棚田耕吉 1996『米子城山の植物について』山陰歴史館ブックレット６、米子市立山陰歴史館

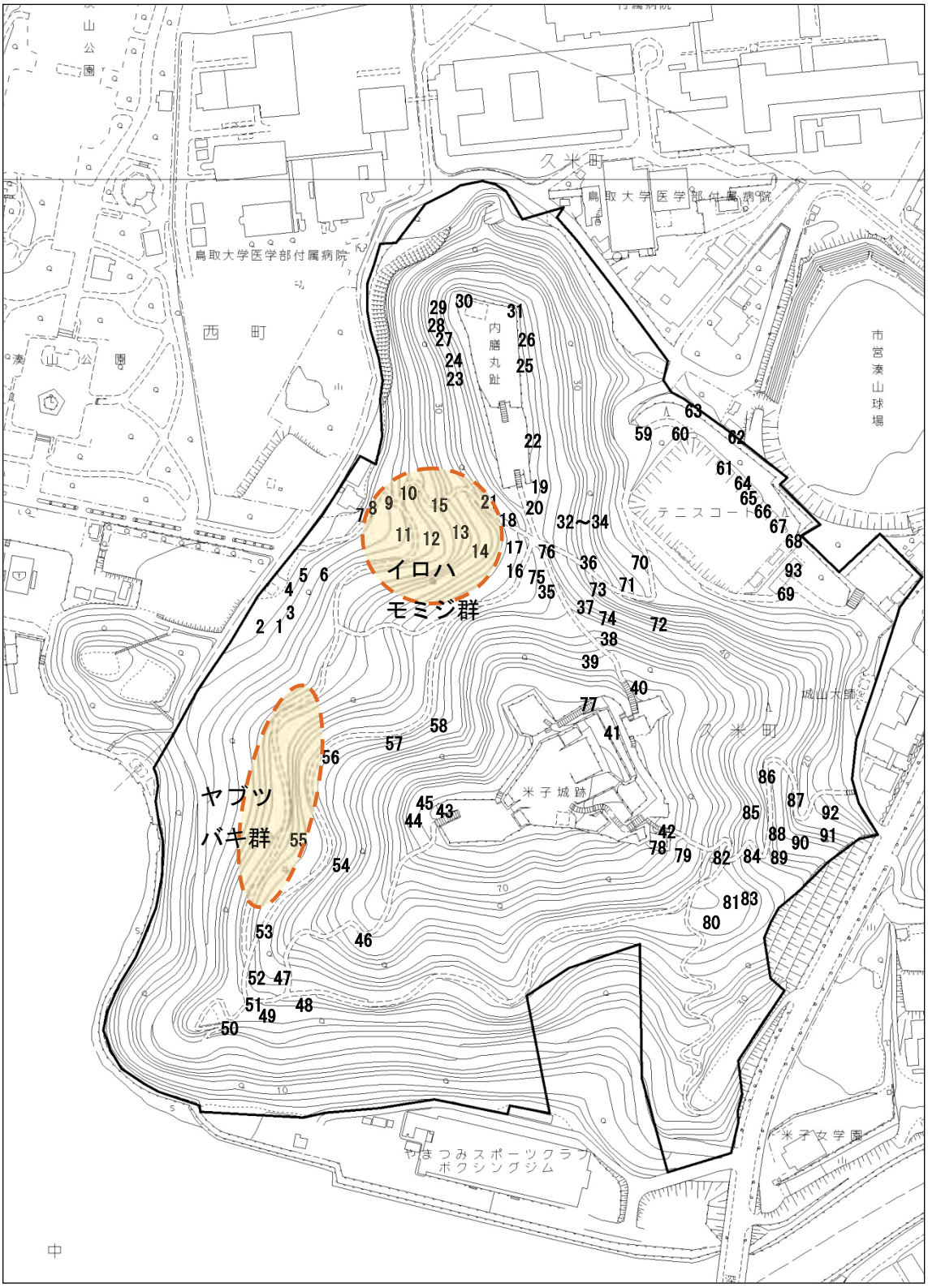
浜田幸夫・神邊成子・景里和夫・木村順二・藤原文子 2015「米子城跡周辺に自生する在来･外来種タンポポの分布調査」『鳥取県西部及び隣県における植生・調査報告書』鳥取県西部希少野生植物保全調査研究会

安岡幸子・永松大・有川智己 2011「米子市湊山球場周辺の在来二倍体タンポポ」『山陰自然史研究』№6　鳥取大学

平成 27 年度史跡米子城跡樹木調査結果

番号	樹　　種	備　　考
1	ヤブツバキ	鈴門東屋周辺
2	ムクノキ	鈴門東屋周辺
3	イロハモミジ	鈴門東屋周辺
4	ハゼノキ	鈴門池周辺
5	イロハモミジ	鈴門
6	ヤブツバキ	鈴門
7	ヤブツバキ	鈴門付近階段
8	イヌシデ	鈴門付近階段
9	タブノキ	鈴門～内膳丸/巨木
10	イヌシデ	鈴門～内膳丸/巨木
11	イロハモミジ	鈴門～内膳丸/巨木
12	イロハモミジ	鈴門～内膳丸/巨木
13	イロハモミジ	鈴門～内膳丸、ベンチ付近
14	カゴノキ	鈴門～内膳丸、ベンチ付近
15	タブノキ	鈴門～内膳丸、ベンチ付近
16	カゴノキ	登り石垣
17	ムクノキ	内膳丸入り口
18	スダジイ	内膳丸入り口
19	カゴノキ	内膳丸入り口
20	スダジイ	内膳丸入り口
21	クスノキ	内膳丸入り口
22	スダジイ	内膳丸下段
23	アカメガシワ	内膳丸上段
24	エノキ	内膳丸上段
25	スダジイ	内膳丸上段
26	タブノキ	内膳丸上段
27	ソメイヨシノ	内膳丸上段
28	スダジイ	内膳丸上段
29	スダジイ	内膳丸上段
30	ヤブニッケイ	内膳丸上段
31	ヤマハゼ	内膳丸上段
32	イヌシデ	内膳丸別れ付近
33	イヌシデ	内膳丸別れ付近
34	イヌシデ	内膳丸別れ付近
35	カゴノキ	内膳丸別れ～本丸階段
36	イヌシデ	内膳丸別れ～本丸階段
37	スダジイ	内膳丸別れ～本丸階段
38	スダジイ	内膳丸別れ～本丸階段
39	カゴノキ	内膳丸別れ～本丸階段
40	シロダモ	内膳丸別れ～本丸階段
41	コマユミ	内膳丸別れ～本丸階段
42	ソメイヨシノ	内膳丸別れ～本丸階段
43	アカメガシワ	水手郭
44	カラスザンショウ	水手郭
45	シラカシ	水手郭
46	モチノキ	水手郭～お大師道
47	シラカシ	水手郭～お大師道

番号	樹　　種	備　　考
48	不明	水手郭～お大師道
49	カゴノキ	水手郭～お大師道
50	ソメイヨシノ	お大師道
51	ヤブツバキ	お大師道
52	シロダモ	お大師道
53	カゴノキ	お大師道
54	オオムラサキシキブ	お大師道
55	ムクノキ	お大師道
56	イヌビワ	お大師道
57	タラノキ	お大師道
58	ムラサキシキブ	お大師道
59	クスノキ	二の丸
60	ハリエンジュ	二の丸
61	クスノキ	二の丸
62	アメリカスズカケノキ	三の丸、球場ライト側入り口
63	モミジハフウ	三の丸、球場ライト側入り口
64	エンジュ	二の丸
65	アカメガシワ	二の丸
66	イヌビワ	二の丸
67	イチョウ	二の丸
68	ヒマラヤスギ	二の丸
69	ニワウルシ	長屋門前
70	ムクノキ	二の丸～天守登城路
71	カクレミノ	二の丸～天守登城路
72	ヤブツバキ	二の丸～天守登城路
73	イヌシデ	二の丸～天守登城路
74	カゴノキ	二の丸～天守登城路
75	タブノキ	二の丸～天守登城路
76	タブノキ	四重櫓脇登城路
77	不明	四重櫓脇登城路
78	イヌシデ	正門～天守登城路本丸脇
79	ヤブニッケイ	正門～天守登城路
80	スダジイ	正門～天守登城路 お大師巡り 19 番前
81	スダジイ	正門～天守登城路 お大師巡り 17 番前
82	カラスザンショウ	正門～天守登城路 お大師巡り 18 番前
83	クロキ	正門～天守登城路 お大師巡り 15 番前
84	モチノキ	正門～天守登城路 お大師巡り 14 番前
85	ツブラジイ	正門～天守登城路 お大師巡り 13 番上
86	イヌビワ	正門～天守登城路
87	スダジイ	正門～天守登城路
88	クロキ	正門～天守登城路 お大師巡り 9 番前
89	モチノキ	正門～天守登城路　お大師巡り 8 番横
90	スダジイ	正門～天守登城路 お大師巡り 8 番前
91	イヌシデ	正門～天守登城路
92	イヌビワ	正門～天守登城路
93	エノキ	正門～天守登城路
94	サワラ	正門～天守登城路



平成 27 年度史跡米子城跡樹木調査図

３動物相

米子城跡のある湊山の一帯は、標高 90.1ｍで、城の建物がなくなってから約 140 年が経ち、自然豊かな現況となっている。中・大型哺乳類はみられず、小型哺乳類、爬虫類、両生類、鳥類、昆虫類等の一般的な動物が生息している。一帯は、中海国設鳥獣保護区内にあり、都市に隣接する山としては植林や外来植物の侵入も少なく、自然林で覆われた貴重な暖帯林の森林特性を保ち、鳥類の好む果実を多くつけるため、野鳥類が多く生息する。

天守石垣のモンキアゲハ

その他モグラ、トカゲ、ヘビ、カエル等の市内で一般的な爬虫類、両生類等が生息している。昆虫類では市内で一般的にみられるトンボや蝶、セミ等の昆虫類が生息する。蝶類はアオスジアゲハやスジグロシロチョウ等が見られ、カラスザンショウやエノキ等の食草付近では頻繁に観察することができる。

鳥取県西部地震後の復旧工事中の米子城本丸（西を望む）

第２節　米子城の歴史環境調査

１米子城の歴史

（１）米子城の概略

米子城は、応仁～文明年間(1467～1487)に山名宗之により国境警備の砦として飯山に築かれたことに始まるといわれている。

この飯山については諸説あるが、近世城郭としての米子城は、戦国時代末期の天正 19 年(1591)頃に東出雲・隠岐・西伯耆の領主であった吉川広家により湊山に築城が開始されたといわれている。中世末期までの米子湊は、現在より深浦寄りの内膳丸麓に近いところであったと推測され、湊山城築城をはじめた吉川広家の時代に石垣を築くなどの港湾整備が行われたものと思われる。

しかし、慶長 5 年(1600)の関ヶ原の戦後、吉川広家は岩国に転封となる。広家の領内統治の時代は戦陣、出兵に明け暮れており、7 割方完成といわれた米子城がどこまで築城されていたのかについては明らかではない。わずかに残る文書に、皆生村を開拓した八幡新兵衛への安堵状、日御碕神社への犬田村（陰田村）保証文、日吉津村伊勢宮への神田・祭礼用米の保証文などがあり、広家時代の行政の一端がうかがわれるだけである。しかしながら、海陸の要地として雲伯両国の中心に位置し、港町でもあった米子の湊山を選び、城下町の区割りや城の縄張りを定め、城を築いた広家の功績は大きい。

吉川広家に代わって、慶長 6 年(1601)に 18 万石の領主として駿河から入った中村一忠は一旦、尾高城に入り、慶長 7 年(1602)頃米子城を完成させ、入城したと言われている。当時、中村一忠は 11 歳と幼少であったため、家老の横田内膳村詮が城下町を整備し、藩政を治め、これにより、米子城の惣構(そうがまえ)がほぼ完成したと考えられている。しかし、慶長 14 年(1609)に中村一忠は急死し、中村家は断絶する。

米子城騒動

慶長 8 年(1603)11 月 14 日、米子城内において中村一忠によって家老横田内膳村詮が殺害される事件が起きた。これが「米子城騒動」である。横田一族は一忠に戦いを挑むが、敗れて一族は自刃、滅亡する。

この米子城騒動については諸説あるが、一忠は騒動から 6 年後の慶長 14 年(1609)に急死し、跡継ぎがなかったため所領は没収され、中村家は断絶となった。

中村一忠墓地

一忠は、殉死した 2 人の小姓、垂井勘解由(たるいかげゆ)と服部若狭(はっとりわかさ)と共に、中村家の菩提寺である感応寺（米子市祇園町）裏山に葬られ、御影堂を建立、3 人の木像が安置された。

明治 41 年(1908)、老朽化した御影堂の代わりに感応寺裏手の墓所に「故伯耆守中村一忠公之墓」が建てられ、昭和 34 年(1959) には五輪塔が建立されている。木像は現在、本堂に安置され、墓地とともに市指定史跡となっている。また、妙興寺（米子市寺町）には横田内膳村詮の墓碑があり、画像と遺品の木杯が所蔵されている。

横田内膳村詮の墓碑

中村家断絶後、慶長 15 年(1610)に会見・汗入の領主として加藤貞泰（6 万石）が美濃国黒野から入城する。貞泰は米子に移ると、御船奉行に市橋新右衛門重長を就任させ、元和 2 年(1616)には御座船として駒手丸を竣工させている。また、慶長 16 年(1611)10 月 18 日、陰田の山王社に社領三石を寄進、勝田神社の造営、祇園社の再建造営、元和 2 年(1616)3 月 12 日、粟嶋神社を再建造営、伊予国大洲に転封直前の元和 3 年(1617)4 月には大山寺の地蔵権現社の神輿の修造などを行っている。このほか、貞泰は美濃国黒野に父光泰の菩提所として指月山曹渓院を開創し、伊予国大洲でも指月山曹渓院を建立し、のちに龍護山と改号している。開山はいずれも九嶽和尚である。米子では曹渓院については一切触れていないが「曹渓院行状記」には次のような記述がある。

> 光泰遺骨ヲ甲州ニ持帰リシ時、城中ヲ遠慮シテ、先善光寺本堂ニ入、住職共ニ守護シ、後日適子貞泰、并ニ諸士共ニ附従テ遺骨ヲ葬ムル墓ヲ築キ、高サ五尺ノ石碑ヲ立ル、某銘曰、
>
> 曹渓院殿前遠州大守剛園宗勝大禅定門
>
> 於　干朝鮮国釜山浦逝矣因茲彫刻一軀以伸供養者也
>
> 右ハ墳墓ノ石墻高クシテ、石碑ノ上ニ六角ノ堂アルヨシヲ伝ル也、又其後遺骨ヲ禅宗指月山曹渓院ニ葬ル、貞泰甲州ヨリ濃州黒野エ所替ノ時、光泰遺骨ヲ取分、善光寺ノ弟子差添来テ、黒野エ葬ラシメ、其後伯州米子ニ於テ、貞泰孝養ノタメニ一字ヲ建立シ、曹渓院ト号ス、九嶽和尚ヲ開基トス、予州大洲エ所替ノ時、此地エ移シテ世々菩提所トス

これにより、貞泰が九嶽和尚を開山として、美濃国黒野及び米子、大洲のいずれにも曹渓院を開創したことがわかる。美濃国黒野の指月山曹渓院の開山となった九嶽和尚は、伊予国大洲の指月山（後に龍護山と改号）曹渓院の開山ともなっている。

米子での曹渓院の場所は、現在貞泰建立の五輪塔のある清洞寺跡(後述)と呼ばれる巨岩群の地と考えられる。加藤貞泰の米子在城時代の資料は皆無といってもいいが、大洲では後に元文 4 年(1739)11 月、光泰の 6 代目にあたる大洲藩主加藤遠江守泰吉によって「曹渓院行状記」、元文 5 年(1740)大洲藩士人見栄智により「大洲秘録」、その他に「北藤録」、「積鹿邦語」、「大洲温故集」など米子在城時代の資料も記述されている。

加藤貞泰は 6 万石であったから、中村氏の 1/3 の石高であり、したがって家臣団もその程度であったと思われる。大洲市史によれば、米子から転封の時、引率の給人数は 132 人であったとされる。米子城下で、その家臣団が住んだのは、おそらく内堀に沿った地区とそれに接する地区、今でいえば、米子駅～湊山公園前通りあたりから内側を占めていたと思われる。

家臣の中で特筆すべきは、江戸時代初期の陽明学者であり、近江聖人と呼ばれた中江藤樹である。中江藤樹の祖父、徳左衛門吉長は加藤貞泰に仕えており、美濃国黒野より貞泰とともに米子に移ったといわれている。

吉長の嫡子吉次は武士としての道を捨てて近江に帰農していた。藤樹は吉次の長男として慶長 13 年(1608)3 月 7 日、近江国高嶋郡上小川村に生れ幼名を原蔵といった。幼くして学問を好み利発であった。祖父の吉長は何としても自分の手許で学ばせ、自分の継嗣として武士にしたいものと、吉次夫婦を説得し、遂に元和 2 年(1616)春これを承知させて原蔵を米子に連れてきた。翌元和 3 年(1617)7 月、10 歳の原蔵は貞泰転封に従って伊予国

「中江藤樹先生成長之地」の碑

大洲に移っている。賀茂神社の東にあったというその屋敷は、国道 9 号と駅前通りの交差点付近で旧就将小学校敷地の角であったと推定され、現在その地には石碑が建てられている。中江吉長は大洲領に移ってから軍奉行をつとめた家柄であるから、禄高は鳥取藩元禄の禄制からすると 200 石前後の格であったと思われる。

元和 3 年(1617)加藤氏が伊予大洲に転封した後、藩主池田光政の一族の池田由之、由成が米子城預かり(3 万 2 千石)となり、寛永 9 年(1632)まで米子城を預かった。「池田天城家士帳」によると池田由之・由成の家臣団は、元和時代は、禄高最高 400 石以下 27 名が記されている。次いで寛永時代の士帳によると、家臣の数は最高 480 石以下 43 名と増加している。藩主光政が 9 才で就任し、しかも在任中は過半の年月が在江戸、在京都であったから、由成も藩主に従ったことが多く、また鳥取での藩政の取り仕切りもあったと思われ、上記の家臣団の何名かが米子で行政に直接当たったことになると思われるが、具体的な人名などは不明である。

寛永 9 年(1632)に池田光仲が岡山から鳥取藩主となると、家老・荒尾成利が米子城預かりとなり、以後、明治 2 年(1869)に藩庁へ引き渡されるまで、代々荒尾氏が城を預かり管理した。最初に米子城を預けられた荒尾成利は藩政の中心人物で鳥取を離れることが困難であったから、弟の成政を与力頭として米子へ差し置く許可を幕府から得た。成政は禄 2 千石、鉄砲 30 挺を預けられた。成政のほかに津田監物（1 千石）荒尾義太夫（800 石）を加えて 3 人が御政事補佐役（筆頭役）を務めた。米子城は出雲領との境に近いため、このように高禄の者を筆頭役に任じたと思われる。

荒尾家墓所附位牌

米子市博労町の祥光山了春寺は黄檗宗で、家老荒尾氏の菩提寺である。この寺はもと中海の亀島（現清洞寺跡）にあったが、宝永 7 年(1710)に現地に移された。この寺の裏側には 2 代成直以後歴代荒尾家の墓碑と家臣の献灯が置かれている。ただし、初代成利、10 代成裕の墓碑は鳥取の興禅寺裏山にあるため、了春寺には初代の墓域のみが設定されている。

荒尾家墓所

墓所には 2 代成直（祥光院殿）、3 代成重（了春院殿）、4 代成倫（本源院殿）、5 代成昭（英智院殿）、6 代成昌（俊徳院殿）、7 代成照（聴徳院殿）、8 代成尚（謙徳院殿）、9 代成緒（泰智院殿）、11 代成富（在原朝臣荒尾成富）、12 代成文（在原朝臣荒尾成文）、13 代之茂（松柏院殿）の各碑および、2 代長子成氏、4 代後室、10 代室、13 代の男爵荒尾之茂と縁組した冷泉家 22 代当主冷泉為系の長女須賀子の墓が整然と立ち並んでいる。

中村氏断絶の後、6 万石の加藤氏、3 万石の池田氏、1 万 5 千石の荒尾氏と城主が変わり、荒尾氏時代には鳥取からの米子詰組士も居住したとはいえ、中村氏時代に比べると居住武士の数は減っている。したがって、武家居住区には多くの空き地が生じた。18 世紀になって、大寺屋船越（紺屋町）がその空地を水田に開拓してこれを「屋敷田」と称したのが、現在の東町・中町・西町・天神町などに当たる広い耕地である。荒尾氏時代、本藩からの米子詰組士と荒尾氏の家来筋とは凡そ居住区を分

けており、前者は主として東町・中町、後者は主として西町の区域であった。足軽 50 人組、30 人組は中町筋と愛宕町筋に集住した。

慶長 7 年(1602)に中村氏の家老横田内膳村栓は近世初頭の地域支配の上での海運政策の重要性を認識しており、米子及び近辺の船頭あてに、米子湊への船の出入自由を通告している。この頃になると、米子湊の中心は旧加茂川の方に移されていったと推測され、荒尾氏時代には加茂川口に接して船繋所が整備され、加茂川右岸に藩の番所が置かれている。この番所は慶文 5 年(1665)米子湾奥部の深浦にも番所が許可されたのに伴い「川口番所」と称されるようになった。番所の主な役割は米子湊を出入りする船・積荷及び人の監視で、西伯耆沿岸部の警備にも当たった。17 世紀末から 18 世紀末初の米子城下絵図をみると、川口番所横手から突堤が 50 間、その南に水路をへだてて 30 間ばかりの離岸堤がみられる。小船はこの湊内に繋留し、大型船は沖合に錠をおろしたらしい。しかし、18 世紀後半の絵図をみると、加茂川口左岸からも突堤を出す改修工事がなされたらしく、完全に湊内を形成している。

清洞寺跡

現在、湊山公園内に市指定文化財「清洞寺跡」として残る岩石群と松は過去には、亀島といわれる小島であった。吉川家文書によれば、米子城築城の際吉川広家は、中海の沿岸にある巨岩の小島「亀島」を整備して船着場を作り、富田城からの物資が船で運ばれたといわれている。その後、周囲が埋め立てられ陸続きとなったものである。

清洞寺跡

米子の 2 代城主加藤貞泰は父光泰の菩提を弔うため、この島に曹渓院を建て、供養の五輪塔を造立した。「曹渓院殿前遠州太守剛園宗勝大居士文禄二年八月二十八日」と刻されていたが、今は判読不能である。

さらに元和 3 年(1617)、池田由成が城主になると、由成は父母の供養のため、亀島に海禅寺を建立し 2 基の五輪塔を造立した。「海禅寺殿前羽州太守雲岳水祥大禅定門　元和四年三月十一日」「即心院殿海厳宗清大禅定尼　慶長十七年二月初五日」と夫妻の戒名が刻まれている。

その後荒尾氏が米子城預かりになると、海禅寺を禅源寺と改め、自らの菩提寺とした。寺はその後 18 世紀はじめ博労町に移された時に「祥光山了春寺」と改められた。宝歴年間(1751～1763)に、寺跡には荒尾の家臣村河氏が江尾から移した清洞寺を菩提寺とし、了春寺の末寺となっていた。そのためこの巨岩を「清洞寺岩」というようになった。

3 基の五輪塔は、明治 40 年(1907)頃了春寺へ移され、昭和 2 年(1927)の市制実施を機に再び旧地に帰されたが、並び方が往時と少し異なっている。

米子城関連年表

年　号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
応仁元年	1467	この頃、山名教之の配下 山名宗之（宗幸）が米子飯山砦を築いたという。	応仁・文明の乱が勃発。（～1477）
文明 2 年	1470	山名軍（羽衣石、小鴨、南条）尼子清貞軍に境松で破れ米子城に逃げ込む（出雲私記）。	
文明 3 年	1471	山名之定 米子城を守る。	
永正 10 年	1513	出雲の尼子経久、この頃から米子城などをしばしば攻める。	
大永 4 年	1524	尼子経久伯耆に侵入　米子城、淀江、尾高、天満、不動嶽の城を攻め落とす（大永の五月崩れ）。	
永禄 5～9 年	1562～1566	尼子毛利の抗争　尼子氏没落。米子城は毛利氏により制圧。	
永禄 11 年	1568		織田信長の入京。
元亀 2 年	1571	山中鹿之助らによる尼子氏再興運動　羽倉孫兵衛 500 人で米子町を焼き討ちにする。 城番　福頼元秀は防ぎきれず、城に逃げ込む。	
天正元年	1573		織田信長が室町幕府を滅ぼす。
天正 3 年	1575	京都より薩摩に戻る途中の島津家久一行、米子を通過する。「よなこといへる町」との記述からも、少なくともこの頃には町が形成されていたと思われる（『中書家久公御上京日記』）。	吉川元春、尼子方伯耆由良城を攻略する。
天正 4 年	1576		織田信長が安土城築城を開始。
天正 6 年	1578	尼子勝久上月城で自刃　尼子氏滅ぶ。 この頃の米子城番は古曳吉種。	
天正 8～10 年	1580～1582		織田対毛利の合戦。 羽柴秀吉による鳥取城攻め。 本能寺の変で信長が死去。
天正 13 年	1585	八橋以西の伯耆三郡が毛利氏の領地となる。	羽柴秀吉と毛利輝元の和睦。
天正 18 年	1590		豊臣秀吉が天下統一。
天正 19 年	1591	吉川広家が秀吉から西伯耆、出雲、備後など 12 万石を認知され富田城に入るが、居城を米子に変え、山県九左衛門を奉行として築城開始。お立山を「湊山」と改名する。 吉川広家伯耆西 3 郡の法勝寺、四日市（戸上城）、尾高、日野（黒坂）の城下町の住民を米子に勧誘する。	
文禄元年～慶長 3 年	1592～1598	吉川広家が古曳吉種とともに朝鮮役に従軍。古曳吉種は朝鮮で討ち死。	文禄・慶長の役。（朝鮮出兵）
慶長 3 年	1598	吉川広家 富田城に帰り、湊山築城を監督。 米子港・深浦港整備も始まる。	豊臣秀吉死去。朝鮮半島の日本軍撤退
慶長 5 年	1600	吉川広家西軍として出陣　築城奉行は祖式九右衛門（長吉）米子城完成のため住民 6 割を動員する。 吉川広家、周防国岩国（3 万石）に転封、この頃城は 7 割方完成。 駿河国府中城主、中村一忠（18 万石）が伯耆国領主となり尾高城に入る。 家老横田内膳の経済政策　倉吉、岩倉（関金）の住民を米子に勧誘し、米子町の都市計画を立案。	関ヶ原の戦。
慶長 7 年	1602	中村一忠、尾高城から完成した米子城に移る。	
慶長 8 年	1603	中村一忠、家老の横田内膳を暗殺（米子城騒動）。	徳川家康が江戸幕府を開く。

年　号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
慶長 9 年	1604	幕府の命によって佐藤半左衛門、河毛備後を米子城の執政とし、君側の安井清一郎、天野宗把、道長長右衛門を死罪にする。	
慶長 14 年	1609	中村一忠 20 歳にて死、中村家は断絶。 岐阜美濃国黒野城主加藤貞泰、伯耆国会見・汗入郡 6 万石領主となり入国する。	
慶長 17 年	1612		幕府、キリシタンを禁じる。
慶長 19 年	1614	加藤貞泰、大坂冬の陣で戦功を挙げる。 この頃、加藤貞泰、日下瑞仙寺、大寺村安国寺を米子城下の寺町に移し、米子城下の氏神勝田大明神を現在地に移す。 亡父加藤光泰のために菩提寺曹渓院を亀島に建立、五輪塔を立てる。	大坂冬の陣。
元和元年	1615	幕府が一国一城令を発したが、米子城保存と決まる。	大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡。江戸幕府、一国一城令を制定。
元和 2 年	1616	中江藤樹、祖父中江吉長とともに米子に来住する。 加藤貞泰、駒手丸を建造する。	徳川家康死去。
元和 3 年	1617	加藤貞泰、伊予国大洲に転封。 因伯領主となった池田光政の一族、池田由之が米子城預かり（3 万 2 千石）となる。 米子町人大谷甚吉・村川市兵衛、竹島（韓国名鬱陵島）に漂着、その後幕府より竹島渡航を許可され、あわびアシカ等の魚猟、木竹伐採を行う（竹島一件）。	池田光政が因幡・伯耆 32 万石の領主となる。
元和 4 年	1618	池田由之死亡、子由成が米子城主となる。 由成、亡父由之供養のため、海禅寺を亀島に建てる。	
寛永 9 年	1632	池田光仲、因伯支配（32 万石）、鳥取藩主席家老荒尾成利が米子城預かりとなる。米子城下には成利の弟成政が 2000 石で遣わされる。	
承応元年	1652	荒尾成利が隠居し、2 代目成直 米子城預りとなる。	
寛文 5 年	1665	堀が埋まる害があるため、米子城の内堀に柴積み船の入ることを禁止する。	
寛文 7 年	1667	米子城西北部外郭修理。	
寛文 12 年	1672	荒尾成直が米子城に入る。	鎖国令、参勤交代制の確立。
延宝元年	1673	米子城下侍屋敷の空家について、荒尾氏が米子町奉行に命じて適当に処分することを許可し、区画を整理する。	寛永通宝初鋳。
延宝 7 年	1679	荒尾成政 没する。 3 代目荒尾成重、米子城預りとなる。	
貞享 2 年	1685		池田綱清、鳥取藩 2 代藩主となる。
貞享 4 年	1687		「生類憐みの令」発布。
元禄 5 年	1692	4 代目荒尾成倫、米子城預りとなる。	
元禄 6 年	1693	落雷などによる天守閣への危険を考慮し、米子城本丸天守近くの蔵に収蔵の火薬類を、内膳丸の角櫓に移す。	
元禄 10 年	1697	大風で米子城本丸四重櫓が 1 尺 5 寸ほど傾く。	
享保 5 年	1720	米子城米蔵の約半数を大修理。 壁・屋根部分に川石を主体として約 2 万個使用。 4 代目後藤市右衛門が新田を開発する（後の後藤村）。	
享保 19 年	1734	5 代目荒尾成昭、米子城預りとなる。	
延保 4 年	1747	6 代目荒尾成昌、米子城預りとなる。	

年　号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
寛延元年	1748	7 代目荒尾成熙、米子城預りとなる。	
宝暦 13 年	1763	米子城修覆米積立法を制定。 以後、富豪の負担で 1800 石を積み立て、利米 540 石のうち、半額を城郭修覆にあてる。	
安永 7 年	1778	川口番所・陰田番所、藩の直営となる。	ロシア船蝦夷地に来航、松前藩に通商を求める。
天明 7 年	1787	8 代目荒尾成尚、米子城預りとなる	松平定信老中となり、倹約令を出す。 寛政の改革始まる。
寛政元年	1789	幕府巡見使 石尾七兵衛ら 3 人、米子を訪れ、荒尾成尚、米子城二の丸で饗応にあたる。	
寛政 4 年	1792		ロシア使節ラスクマン根室に来航。
寛政 8 年	1796	城下外郭筋堀の埋没を浚渫。 以後、しばしば町人富豪に請け負わせる。	
寛政 12 年	1800		伊能忠敬蝦夷地を測量。
文化 3 年	1806	伊能忠敬 米子町測量第 1 回。 米子城郭内測量を米子役人が拒否する。	
文政元年	1818	9 代目荒尾成緒、米子城預りとなる。 8 月に米子入りし、約 1 ヶ月滞在。	
文政 8 年	1825		外国船打払令。
天保 12 年	1841		天保の改革始まる。
天保 13 年	1842	藩内海岸の各番所に大砲が備え付けられる。このうち、境番所と米子川口番所は荒尾氏の負担とする（『鳥取県郷土誌』）。	
天保 14 年	1843	異国船警衛のため、荒尾成裕、父成緒に代わり米子城入りする。	
嘉永 4 年	1851	10 代目荒尾成裕、米子城預りとなる。	
嘉永 5 年	1852	四重櫓と石垣を鹿島家の負担により大修理。	
嘉永 6 年	1853		アメリカ使節ペリー浦賀来航。
安政 5 年	1858		日米修好通商条約調印
文久 3 年	1863	荒尾成裕・成富父子海岸防備のため米子入城。	幕府、自国海岸防備の厳を達する。 境台場に大砲 8 門配備。淀江台場築造、台場砲 3 門配備。
慶応 3 年	1867	11 代目荒尾成富、米子城預りとなる。	大政奉還。
慶応 4 年	1868	2 月、山陰道鎮撫総督 西園寺公望と一行数百名、米子城下に入る。	明治維新。
明治 2 年	1869	2 月、荒尾氏 自分手政治廃止の発令。 5 月、朝廷より米子城返上の命令あり。城内の武器は鳥取に引き渡される。 8 月、米子城を藩庁に引き渡す。 10 月、荒尾成富、家督を成文に譲る。 三の丸西裏御門(現鳥取医大病院地)のところに坂口氏の醸造工場が設立される。	池田慶徳、鳥取藩知事となる。

年　号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
明治 3 年	1870	救民のため、在町の富豪の寄付により人夫徴発、米子城外堀浚渫の請負を行わせる。	藩知事伯耆西 3 郡巡視、米子市も鹿島家に宿泊する。
明治 4 年	1871		廃藩置県。鳥取県誕生。因幡国、伯耆国は鳥取県となる。
明治 5 年	1872	1 月　区制を敷き、町を 3 区にわけて戸長を置く。 第 82 区（東町・堀端町・郭内・西町・宮町・中町・五十人町・内町・天神町） 第 83 区（博労町・糀町・道笑町・日野町・茶町・塩町・大工町・新博労町） 第 84 区（法勝寺町・紺屋町・四日市町・東倉吉町・西倉吉町・尾高町・岩倉町・立町・灘町・灘町新田・寺町・新法勝寺町） 米子城山は士族小倉直人らに払い下げとなる。 西町に鳥取県米子支庁を置く。	
明治 6 年	1873	米子城を大蔵省に移す。 城内の建物類が売却され、数年後、取り壊される。	廃城令。廃刀令。 12 月　大区小区制施行により、米子は第 13 大区に入り、第 82 区は小 4 区、第 83 区は小 3 区、第 84 区は小 5 区となる。
明治 9 年	1876		鳥取県は島根県に合併。
明治 11 年	1878		郡区町村編制法により、島根県会見郡米子町・汗入郡淀江町として町制施行。
明治 12 年	1879	この頃天守の取り壊しが始まる。	
明治 13 年	1880	松江監獄米子分監が米子城三の丸（現湊山球場地）の米蔵を利用して置かれ、広い面積を占めていた。	監獄の制度を定め、松江監獄署内に監獄本署を置き、松江・鳥取・浜田・米子・杵築・隠岐（西郷）に支所を置く。
明治 14 年	1881		島根県から因幡国 8 郡・伯耆国 6 郡の 2 州を分割し、鳥取県が再置される。
明治 19 年	1886	深浦（御船手）郭に城南病院が建設される。	
明治 22 年	1889		町村制施行により、会見郡米子町・汗入郡淀江町が発足。
明治 25 年	1892	この頃、湊山と飯山の北側は荒尾政成の所有地、飯山南側と湊山本丸は小倉直人が所有、湊山西面は児島喜平が所有。 これを米子町に売却し、売却金半額を町に寄付する話、進展せず。 その後、数年で全山ほとんど坂口平兵衛の所有となる。 この頃、三の丸には原牧場が造られる（昭和 15 年閉場）。	
明治 26 年	1893	現鳥取大学医学部附属病院地に鳥取県立病院米子支部病院が創設される。	洪水、米子町の過半浸水する。
明治 29 年	1896	大手門入口の飯山下に西伯郡役所が開設される。	郡の統廃合により、会見郡・汗入郡から西伯郡に変更。
明治 32 年	1899	三の丸鈴門側のところに日本冷蔵商会が設立される。 県立鳥取病院米子支部病院を西伯郡立病院とする。	
明治 35 年	1902	城山下の乳業家原弘業が地主 坂口平兵衛に相談し、城山本丸を整備して弘楽園とし、茶亭富士見亭を建て、うば団子を名物とする。	
明治 38 年	1905	三の丸、郡役所の東に合資会社米子製鋼所が設立される。	
明治 39 年	1906	枡形および二の丸表中御門付近に米城焼が開かれる。 錦公園が竣工、鳳翔閣・西伯郡公会堂が建設される。 清洞寺跡の五輪塔、了春寺に移設される。	

年　号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
明治 40 年	1907	皇太子御召艦鹿島にて境に上陸、鳳翔閣に 2 泊。	皇太子、山陰地方に行啓。
明治 41 年	1908	錦公園に日露戦争記念碑を建立する。 米子港修築開始。	山陰線、米子―鳥取間、米子―松江間が開通する。
明治 44 年	1911	深浦港の浚渫が完了する。	
明治 45 年	1912		米子で「山陰鉄道開通記念全国特産品博覧会」が開催される。
大正 12 年	1923	上後藤に移転した三の丸の米子分監跡地に後藤グランドが開場する。 郡制廃止に伴い、錦公園・鳳翔閣・公会堂・物産陳列場を米子町に譲渡する。	郡制廃止。 関東大震災。
大正 13 年	1924	湊山を禁漁区にする。	
大正 15 年	1926	6 月 13 日、郡役所が廃止される。	
昭和 2 年	1927	了春寺の五輪塔、清洞寺岩に戻される。	西伯郡米子町が鳥取県下で 2 番目に市制を施行。米子市となる。
昭和 3 年	1928	錦公園内に噴水池築造、通水式を行う。	
昭和 8 年	1933	坂口家が湊山約 34,000 坪を米子市に寄付する。 深浦港改良工事完了。	
昭和 9 年	1934	湊山公園整備計画策定。	
昭和 10 年	1935	登山路の改修、天守にベンチ施設。ソメイヨシノの植栽。	米子市の町区変更、新町設定 47 町を 66 町とする。
昭和 11 年	1936	深浦に石黒造船所米子工場が創業、昭和 16 年米子造船所となる。	
昭和 15 年	1940	米子市湊山公園風致地区を設定する。	山陰歴史館が 2600 年記念事業として米子商品陳列場に開館する。
昭和 19 年	1944	米子城二の丸跡地英霊塔敷地工事が完成する。	
昭和 20 年	1945	3 月、米子医学専門学校附属病院（現・鳥取大学医学部附属病院）が設立される。	建物強制疎開。 7 月 24 日 － 7 月 28 日 米子空襲。特に 28 日の空襲では最大の被害が出た。
昭和 22 年	1947		昭和天皇行幸、坂口家泊。
昭和 25 年	1950	鳥取県産業観光博覧会が三の丸（現湊山球場地）二の丸で開催される。	
昭和 26 年	1951	湊山公園計画の一部として出山を整備、山麓に海水浴場が開設される。	
昭和 28 年	1953	小原家から寄付を受け、長屋門が二の丸に移設され、米子市立山陰歴史館として開館。 産業観光博覧会時の美術館跡地(現西部医師会館地)が県立米子図書館となる(～昭和 54 年)。 湊山球場第 1 期工事完成、6 月 1 日球場開きを行う。	
昭和 32 年	1957	米子城跡、都市公園として湊山公園の一画となる。	
昭和 34 年	1959	深浦大橋が完成する。	

年　号	西暦	米子城跡に関する出来事	関連する主な動向
昭和 35 年	1960	国道 9 号線が湊山と飯山の間を貫通する。	
昭和 39 年	1964	湊山球場に隣接して米子児童図書館が建設される。	
昭和 41 年	1966	飯山に英霊塔が建設される。	法勝寺電車廃線となる。 皇太子、同妃、来米、第 8 回国立公園大会に臨席される。
昭和 42 年	1967	深浦（御船手）郭にＹＳＰが建設される。	
昭和 45 年	1970	錦公園の鳳翔閣を解体する。 中江藤樹顕彰碑を就将小学校跡に建立する。	
昭和 46 年	1971	清洞寺岩沖から出山を結ぶ埋立地を造成する。	
昭和 48 年	1973	廃線後の法勝寺電車客車が米子図書館横に置かれ、読書室として活用される（～昭和 61 年）。	
昭和 52 年	1977	「米子城跡」、「旧小原家長屋門」、「清洞寺跡」が米子市指定文化財となる。	
昭和 53 年	1978	中村一忠墓地附中村一忠主従木像を、米子市指定文化財に指定する。 米子城跡に電飾城が初目見えする。	
昭和 57～59 年	1982～1984	石垣修理工事を実施する。	
昭和 61 年	1986	三の丸の法勝寺電車を湊山公園内に移転する。 城山大師補強修理工事世話人会が結成され、弘法大師の補修が完成する。	
昭和 62 年	1987	鳥取大学医学部附属病院の拡充計画のため、三の丸の稲田氏醸造工場は夜見に移転する。	
昭和 63～平成元年	1988～1989	病院建設に伴い、久米第 1 遺跡の発掘調査を実施する。	
平成 3 年	1991～1992	病棟改築工事に伴い、米子城跡№1 遺跡の発掘調査を実施し、船入石垣の遺構を検出する（～4 年）。 湊山公園の法勝寺電車をパティオ広場に移設する。	
平成 12 年	2000		鳥取県西部地震発生。米子市博労町では震度 5 強を観測。
平成 13 年	2006	震災に伴う石垣修理事業を行う。	
平成 17 年	2005	国史跡指定に係る意見具申（7 月 27 日）	米子市・西伯郡淀江町が新設合併。旧米子市を廃して新・米子市となる。
平成 18 年	2006	本丸跡、内膳丸跡、二の丸跡が国の史跡に指定される。（1 月 26 日）	
平成 20 年	2008	史跡米子城跡整備基本構想案を策定する。（8 月）	
平成 27 年	2015	米子城跡の遺構分布調査、測量調査を行う。 八幡台と推定される地区と水手郭下方で発掘調査を実施する。	
平成 28 年	2016	登り石垣の発掘調査を実施する。	
平成 29 年	2017	史跡米子城跡保存活用計画を策定する。	

（２）史資料調査

１）文献調査

米子城に関連する文献資料については、築城期のものは『吉川家文書』に記述がみられる。江戸期のものは『鳥取藩政資料』に詳しく、また町方のものとしては『鹿島家文書』、『大谷家文書』『後藤家文書』などがある。

①吉川家文書

吉川広家自筆覚書
（吉川家文書）

一本之丸石蔵手間合せ候事、
付門矢蔵之事、
一東之丸石垣幷門矢蔵事、
付あたらしく可申付事、
一土手之坪手間合せ事、
一内ほりの事、
一土手之事、
へいの事、
一富田湊山森山内々用之事

『新鳥取県史』資料編　古代中世１
古文書編より転載

山口県　吉川資料館所蔵。

毛利氏の一族、旧岩国藩主吉川家に伝わる古文書類で、正治２年(1200)から江戸時代貞享年間に至る総数2,393点を収めている。この中には、吉川広家が湊山に築城した際（天正19年（1591））の自筆覚書などが収められている。

②鹿島家文書

米子市　鹿島恒勇氏所蔵。

鹿島家は江戸時代初期に備前から米子立町に移住、後に西伯耆一の豪商となった家であり、米子の町年寄りなどを務め、幕末の米子城の改修を肩代わりした。

③大谷家文書

米子市　個人蔵（一部米子市立山陰歴史館所蔵）。

大谷家は米子灘町の商人で、寛永期から元禄９年(1696)にかけて米子商人の村川市兵衛とともに竹島（韓国名鬱陵島）に渡海し、漁を行った。元禄９年の幕府による竹島渡海禁止以降は有力商人として、町年寄りなども務めた。

④宮本家文書

群馬県前橋市　蔦村早苗氏所蔵。

宮本家はもと備後の武士で、後に米子の道笑町、さらに尾高町へと移住した商人で、伯耆の主要産品である綿の取引に従事した。

２）絵図調査

米子城跡については、関連する絵図資料が豊富に残されており、そこから城郭構造を知ることができる（附編参照）。ただし、現存する郭や石垣などの遺構と絵図資料との対比検討作業については、まだその緒に就いたばかりである。

ここでは、平成 27、28 年度の発掘調査において検出された遺構と絵図資料との対比を検討した。詳細は以下に述べることとするが、今回検出された遺構と絵図とはほぼ合致していることが判明した。

①平成 27 年度発掘調査成果と絵図資料との対比

平成 27 年度の発掘調査の結果、天守南東および南西側の 2 か所において新たな郭が発見された。

・八幡台（本丸南東側）

本丸南東地区では、整地盛土による地業面全体に石垣加工時の砕片や、大型の切石などが散乱していた。この面上から出土した瓦には嘉永丑癸（嘉永 6 年(1853)）の年号が刻まれていたことから、幕末に鹿島家が行った四重櫓の補修時のものであると考えられる。鹿島家文書によれば、米子城の補修工事は、嘉永 5 年(1852)から 7 年(1854)にかけて行われ、深浦から荷揚げした切石を城山内の「八幡台」まで運び上げ、そこで加工したうえで天守に積み上げたと記されている。また、当時の瓦師松原新平氏の日記が現存しており、それによれば嘉永 6 年(1853)に四重櫓改修のための瓦を焼いた、という記述がある。

この「八幡台」については、江戸末期に描かれた「米子御城平面図」（米子市立山陰歴史館蔵）に記載されている。絵図の天守左側の登城路に楕円形の郭が描かれ、そこに「八幡台」の記述がみられる。この場所は、平成 27 年度発掘調査で検出された郭の位置とほぼ合致しており、この場所が八幡台の作業場であることが判明、出土遺物や遺構が文献・絵図資料と合致する貴重な事例である。

「米子御城平面図」に記載された「八幡台」（部分・江戸末期）　右は拡大図

・水手郭下方（本丸南西側）

本丸南西地区では、尾根方向に並行して石垣をめぐらせた上下二段の郭が確認された。石垣は現況ではかなり崩れており、天端石なども失われていたが、自然石を荒く打ち欠いた割石が積まれていることが確認できた。郭の形状は上段が尾根に並行する長方形で、下段は出山方向に地形に沿って屈曲する鍵形を呈し、さらに下段の屈曲部分には出山側からの入口と思われる傾斜路が確認できた。

この郭について絵図を調べてみたところ、「米子御城明細図」（鳥取県立博物館所蔵、元文 4 年（1739））に平面図で描かれていることが判明した。絵図の天守水手御門の下方には中海側に延びる石垣をめぐらせた二段の郭が描かれており、平面形もほぼ発掘調査成果と整合する。入口部分には「上り口三間」の記載があり、階段状の横線が三本描かれていることから、現況では坂道になっている部分の地下に石段が包蔵されている可能性も考えられる。

「米子御城明細図」（元文 4 年（1739））（鳥取県立博物館蔵）

②平成 28 年度発掘調査成果と絵図資料との対比

既存の米子城絵図には、江戸時代を通じて必ず湊山山頂部の本丸遠見櫓から内膳丸にかけての尾根上に登り石垣が描かれている。平成 28 年度の発掘調査の結果、絵図の場所に登り石垣を確認することができた。前述の「米子御城明細図」には、「登り塀三拾五間　石垣高八尺」と記されており、約 63mの長さがあったことがわかるが、調査では、内膳丸側の御門から遠見櫓にかけて約 40m以上の登り石垣を確認することができた。構造としては、尾根頂部の地形を利用し、その中海側（西側）岩盤をＬ字状に削平し、中海側にのみ 6 段以上の荒割石を積んでいる。また、出土遺物から土塁上には瓦葺きの土塀が構築されていた可能性が考えられる。今回の調査では内膳丸から遠見櫓にかけて登り石垣が確認されたこと、石垣が中海側の片側のみの構築であったことが、いずれも絵図資料と符合するものであった。

米子城石垣御補修願絵図（寛文 7 年(1667)6 月 9 日）

伯耆国米子平図（宝永 6 年(1709)4 月 9 日）

伯耆国米子城絵図（文久 3 年(1863)8 月）

「米子御城平面図」（江戸末期）

検出された登り石垣

検出された登り石垣

③石垣修理願絵図

米子城については、近世期に描かれた絵図が比較的多く良好な状態で残されていることから、その縄張りや構造を知ることができ、遺構調査のうえでは欠かせない資料である。特に、石垣修理願絵図は石垣調査の際に、その履歴を知ることができる貴重な一次資料となる。鳥取藩政資料に載せられた石垣修理願絵図については、27 枚（下表）が遺存するが、いずれも 17 世紀後半から 19 世紀代のもので、築城初期の構造を描いたものは確認されていない。

米子城修理願絵図一覧表　　（鳥取藩政資料目録より）

№.	名　　称	製　作　年		所　蔵　者	備　　考
1	米子城石垣御修覆御願絵図	寛文 7 年 6 月 9 日	1667	鳥取県立博物館	県博登録№.998
2	米子城修覆願絵図	元禄 3 年 3 月 11 日	1690	鳥取県立博物館	県博登録№.1001
3	米子城破損修覆願下図	元禄 15 年 4 月	1702	鳥取県立博物館	県博登録№.1003
4	米子城修覆願絵図	元禄 15 年 9 月	1702	鳥取県立博物館	県博登録№.1002
5	米子城修覆願図	享保 2 年 10 月 27 日	1717	鳥取県立博物館	県博登録№.1005
6	米子御城之図	明和 2 年	1765	鳥取県立博物館	県博登録№.1007（修復願下図）
7	伯耆国米子城絵図	天明 2 年 9 月 23 日	1782	鳥取県立博物館	県博登録№.1019（修復願図控）
8	伯耆国米子城絵図	寛政 5 年 1 月 28 日	1793	鳥取県立博物館	県博登録№.1017（修復願図控）
9	伯耆国米子城崩所覚	寛政 6 年	1794	鳥取県立博物館	県博登録№.1018
10	米子城石垣破損所絵図	文政 8 年 5 月	1825	鳥取県立博物館	県博登録№.1020
11	米子城御天守東北側破損絵図	弘化 2 年 9 月 30 日	1845	鳥取県立博物館	県博登録№.1031
12	米子御城門正面之御絵図面	弘化 4 年 9 月	1847	鳥取県立博物館	県博登録№.1030
13	米子御城破損ヶ所絵図	弘化４年 6 月	1847	鳥取県立博物館	県博登録№.1028
14	米子御城石垣等崩絵図	弘化 4 年か？	1847	鳥取県立博物館	県博登録№.1029
15	米子城四重御櫓北側石垣破損図	弘化 4 年か？	1847	鳥取県立博物館	県博登録№.1037-1
16	米子城四重御櫓三方石垣破損図	弘化 4 年か？	1847	鳥取県立博物館	県博登録№.1037-2
17	米子城四重御櫓東北側石垣破損図	弘化 4 年か？	1847	鳥取県立博物館	県博登録№.1037-3
18	米子城四重御櫓東南側石垣破損図	弘化 4 年か？	1847	鳥取県立博物館	県博登録№.1037-4
19	伯耆国米子城絵図	嘉永元年 4 月	1848	鳥取県立博物館	県博登録№.1042（修復願図控）
20	米子御城絵図	嘉永 5 年 9 月	1852	鳥取県立博物館	県博登録№.1041（修復願下図）
21	米子御城絵図	安政 2 年 9 月	1855	鳥取県立博物館	県博登録№.1025（修復願図控）
22	伯耆国米子御城崩所覚	安政 2 年	1855	鳥取県立博物館	県博登録№.1026
23	米子城修復願絵図案	安政 2 年か？	1855	鳥取県立博物館	県博登録№.1021
24	米子城絵図（修復願下図）	安政 2 年か？	1855	鳥取県立博物館	県博登録№.1009
25	伯耆国米子城絵図	文久 2 年 3 月	1862	鳥取県立博物館	県博登録№.1040（修復願図控）
26	伯耆国米子城絵図	文久 3 年 8 月	1863	鳥取県立博物館	県博登録№.1038（鈴門修復願図）
27	米子城破損所下絵図	不明		鳥取県立博物館	県博登録№.1010

（３）測量調査

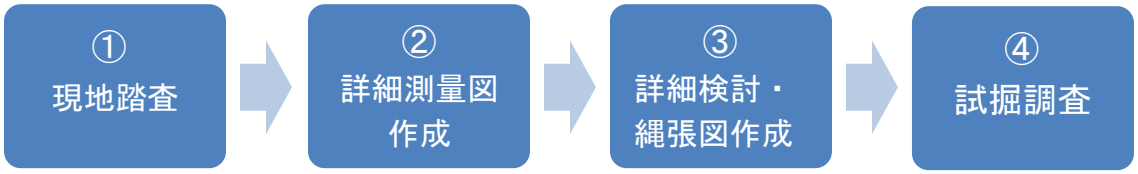
１）測量委託

史跡米子城跡では、今後の調査及び活用、整備に資するため、平成 27 年度、業者委託により米子城跡詳細測量図(1/1,000) の作成及び基準点の設置を行った。下図がその成果である。なお、鳥取大学医学部敷地の部分については都市計画図から転用した。

米子城跡詳細測量図(1/5,000)

２）分布調査

米子城跡整備事業に伴う遺構調査計画に基づき、平成 27 年度から平成 28 年度にかけて、詳細測量図作成のための内容確認調査（現地踏査）を行った。



米子城跡整備事業に伴う遺構調査計画

①現地踏査を行い、遺構の確認を行う。
②確認踏査の成果を元にしながら、詳細測量図を作成する（業者委託）。
③詳細測量図をもとに古絵図、文献資料などとの照合、歴史的変遷などの総合的検討を行い、詳細縄張図を作成する。
④多時期にわたる遺構が包蔵されている可能性も視野に入れた調査を行うために、何か所かで試掘トレンチを設定し、内容確認調査を行いその性格を把握する。

遺構確認現地踏査

1/2,500 の地図をもとに現状地形等の観察を行い、地上に表出している遺構を手がかりに大まかな縄張り図を作成し、遺構の有無を確認した。同時に急傾斜地の安全性に関しても留意し、危険箇所の調査を行った。

・Ａ区…天守エリア

既往の 1/500 測量図をもとに、詳細確認調査を行う。

・Ｂ区…表門～鉄門～深浦門エリア

表門付近から切岸状の登城路、土塁などが散見され、尾根筋には段郭が存在する可能性があり、石切丁場も見られる。近世期とそれ以前及びそれ以降の時期の遺構が存在する可能性が高い。また四国八十八箇所の石仏設置の平坦面は、それ以前の時期の郭を利用、改変している可能性がある。

・Ｃ区…二の丸～枡形～番所跡エリア

枡形周辺の平坦面、石垣、土塁が遺存する。枡形から番所跡への尾根上には段郭と見られる平坦面が遺存する。それに平行して東側の谷筋を利用した竪堀がある可能性も考えられる。裏御門付近にも近代以降の改変を免れた遺構が残存していると思われる。

・Ｄ区…内膳丸～鈴御門～遠見櫓エリア

内膳丸石垣下に帯郭、鈴門から内膳丸への登城路、郭、裏中御門から延びる石垣、鈴御門、石切丁場、登り石垣、竪堀、切岸等が遺存する可能性がある。

米子城跡遺構確認現地踏査図

（４）発掘調査

米子城の縄張りや変遷は、各時代の米子城絵図によってある程度知ることができる。しかし絵図のない時期の変遷は不明であるため、発掘調査の成果が米子城の形成と変遷を探る糸口となる。

これまでに米子城跡関係の発掘調査では、試掘地点を含めて 60 か所が発掘されている。内堀内側の城郭の発掘調査については、石垣補修工事の際に一部が実施された以外に、平成 27 年度から 28 年度にかけて、米子城保存整備計画に伴う発掘調査が行われている。これまでの調査の概要については第 1 表のとおりである。

発掘地点の大半は、内堀の外郭にあった武家屋敷跡であるが､外郭の東側域は調査の手が入っていない。後世の削平を免れた遺構が確認されたのは 15 か所前後であり、縄文時代から現代に至る人々の生活の痕跡が発見されている。

城内では石垣補修や修理等に伴う調査が 3 回、確認調査が 2 回実施されており、本丸部分では番所郭、遠見郭、水手郭、天守郭が調査され、遺構として櫓の建物礎石の一部等が確認されている。また山腹では、八幡台・水手御門下の郭や登り石垣等が新たに確認されている。本丸では、大量の瓦類を除いて出土遺物は少なく築城時期の決め手となるものはない。

文献上では、米子城の築城整備は吉川氏によって始まり、『戸田幸太夫覚書（吉川家文書)』によると、周防国岩国転封の際には「十の内七つ程も出来候」とあり､17 世紀初頭には米子城がほとんどできていたことになる。現在のところこれを裏付ける発掘成果はないが、鳥取大学医学部附属病院の建設に伴う三の丸内の内膳丸下（久米第 1 遺跡）の調査では、15 世紀中葉から後葉の大規模な造成盛土層が確認されており、近世城郭の構築開始時期を示唆するものと考えられる。また、中世に遡る貿易陶磁が多く出土しており、近世城郭構築以前の米子城を解明する上でも興味深い。

吉川氏の時期には、内堀に近い中海側から次第に整備されていったと考えられるが、発掘調査から見る限り、吉川氏は入府前に転封となっているためか、その痕跡は内堀に近い中海側に見られるのみで全体的に薄く、城下町が本格的に整備されたのは、中村氏、加藤氏の時期ではないかと考えられる。

１）城内の遺構

当時の建物等については、現存する旧小原家長屋門や絵図類から規模・構造を知ることができ、絵図にない情報については、発掘調査で知ることができる。しかし発掘範囲は限られた地点であり、また、その後の削平により失われているものが多く、全貌は不明と言わざるを得ない。

城内において、発掘された遺構は、堀・溝・石垣・礎石建物跡・掘立柱建物跡・井戸・柵列・土坑などである。いずれも地下に痕跡を刻んだもので構造物の基礎痕跡でしかないが、絵図にない堀や溝等の新しい知見を具体的に物語っている。

調査によると、本丸部では十間と八間の天守礎石がそのまま残っており、文献記録に残る建物規模と一致している。遠見郭では、遠見櫓と二重櫓の礎石や縁石の一部の残存が確認されている。また、水手郭の南側の二重櫓の縁石の一部も確認されている。

天守の礎石

本丸の石垣は、打ち込みはぎの乱積みや、切石の乱積み、明治以後の乱積み等があり、各時代の石積技法の違いを見ること

ができるが、築城時の石垣修復の際に確認された裏込めは比較的幅が短く大ぶりの割石が込められており、あまり丁寧な裏込め工事ではなかった。

なお、平成 27 年度、28 年度の遺構確認調査については以下に概要を述べることとする。

①平成 27 年度の発掘調査成果：深浦側（天守南側）の２か所で郭を確認

平成 27 年度は現況踏査に基づき、今後の保存、整備に資する資料を得るために対象地の内容確認を目的とするトレンチ 9 本と、石垣確認調査を実施した。

その結果、深浦側の 2 か所に新たな郭が確認された。このうち南東の郭では、整地盛土による地業面全体に石垣加工時の砕片や、大型の切石などが散乱していた。この面上からは幕末頃の磁器碗破片や多量の瓦が出土している。この瓦には嘉永丑癸（嘉永 6 年(1853)）の年号が刻まれていることから、幕末に鹿島家が行った四重櫓の補修時のものと考えられる。鹿島家文書によれば、米子城の補修工事には、深浦から荷揚げした切石を城山内の「八幡台」まで運び上げ、そこで加工したうえで天守に積み上げたと記されている。

今回発見された遺構はこの「八幡台」の石垣加工場である可能性が高い。またその地業面の盛土下部に野面積の石垣が発見された。形状から、幕末以前のものと考えられ、自然石に近い石材を使用していることからも築城初期の構築であると考えられる。

一方、南西の水手御門下方では、石垣を廻らせた上下二段の郭が確認された。石垣は現況ではかなり崩れており、天端石等は失われていたが、自然石を荒く打ち欠いた割石が積まれていることが確認できた。また、上段の郭の入り口部分には表面にノミ調整を施した大型の加工割石も使用されている。下段の郭東側の石垣については自然石が多く用いられた野面積であることから、戦国期にさかのぼる遺構の可能性も考えられよう。

さらに、下段の郭は出山方向にＬ字状に屈曲しており、その間には出山方向からの入り口と思われる坂道が確認できた。このように、深浦側において築城初期の郭の存在を確認できたことは、戦国末期に築城が開始された米子城の構造を解明する上で、非常に重要であると考えられる。

八幡台の築城時の石垣

水手御門下の郭

②平成 28 年度の発掘調査成果：登り石垣の確認

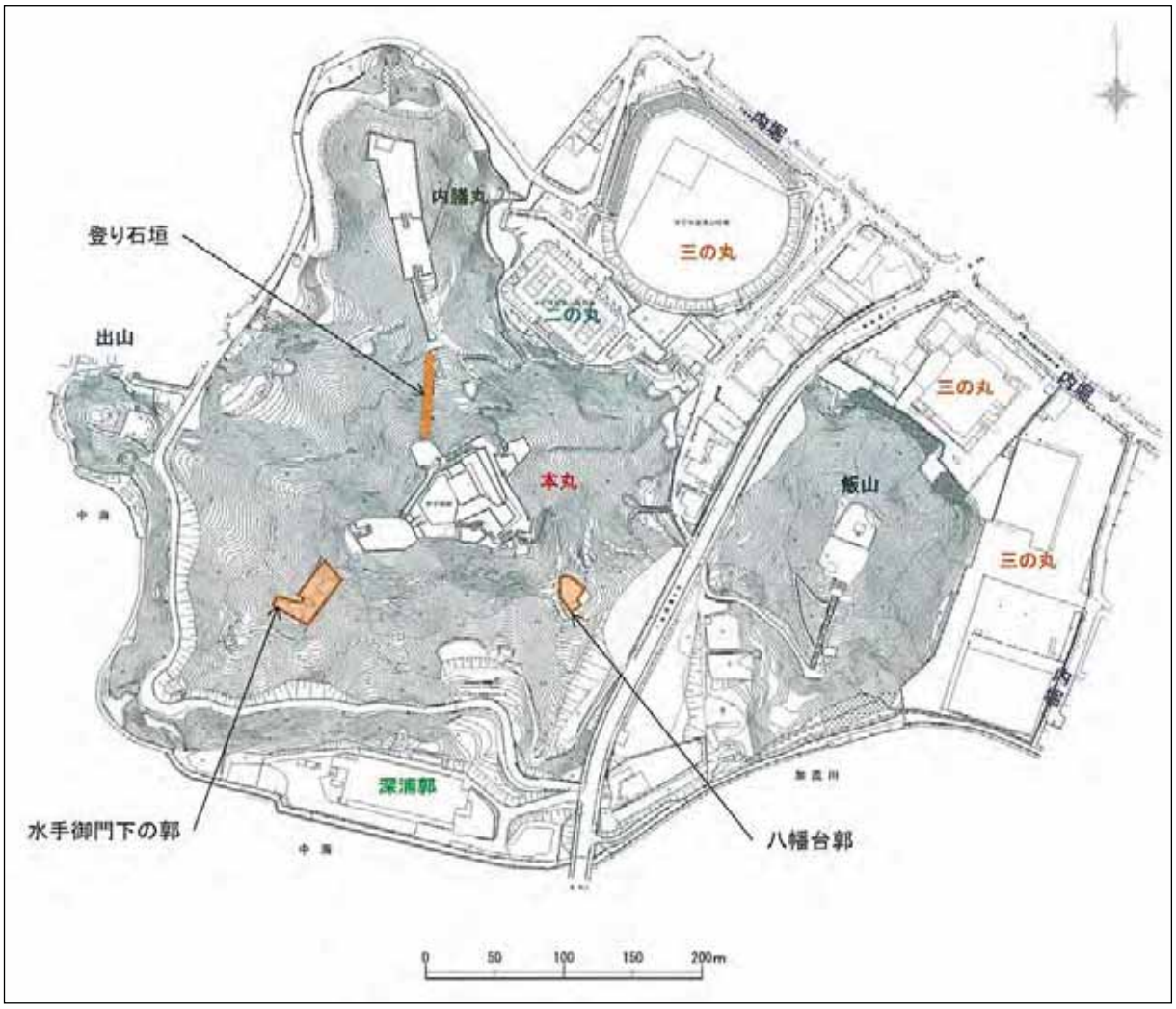
平成 28 年度は、登り石垣の調査を行った。米子城絵図には湊山山頂部の本丸遠見櫓から内膳丸にかけて、登り石垣が記載されている。この部分について現況確認及び、4 か所の試掘トレンチを設け、その構造の解明を行った。今年度の調査の結果、少なくとも登り石垣は内膳丸側の御門から遠見櫓に

かけて約 40mは遺存していることが分かった。その構造については尾根頂部の地形を利用し、その中海側（西側）岩盤をＬ字状に削平し、少なくとも６段以上は石垣を積んでいる。東側は尾根の高低差を利用し、さらにその上に土塁を構築している。石垣高は中海側で 2.5mを測り、その上に瓦葺きの土塀が構築されていたと推測される。

登り石垣

この登り石垣は内膳丸側の石垣とも一連の造作と考えられることから、内膳丸についても築城当初は登り石垣の一部であった可能性も考えられる。登り石垣は豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の時に秀吉軍が朝鮮半島南岸に築いた倭城に多く用いられた構造物で、城域の遮断線や、山上と山麓の一体化、港湾防御などの目的を持つ。吉川広家は朝鮮出兵に参加しており、この倭城の構造を米子城築城に際し、縄張りにとり込んだ可能性が推測される。

以上のことから、平成 27 年度の調査成果を含め、米子城は天守を中心に尾根や谷の自然地形を生かした防御構造をもつ戦国時代的な城であり、また築城当初は特に中海側からの防御を主眼におく海城的な性格を有する城であったと考えられる。



平成 27・28 年度米子城跡発掘調査位置図

２）武家屋敷の遺構

外郭の武家屋敷の調査では、第 33 次調査地において屋敷の構造を知る遺構が発掘されている。この遺構は、17 世紀初頭頃の 5 間×4 間で東と南に庇縁を持つ礎石建物跡、数棟の掘立柱建物跡、溝､井戸、18 世紀頃の 2 間×4 間以上で東に張り出しを持つ礎石建物跡、暗渠跡である。屋敷地の 1/5 の発掘面積ではあったが、敷地中央部に屋敷を構えていた事が判明した。ここは搦手門近くの内堀に面した一等地であり、宝永 6 年(1709)の絵図では、荒尾儀太夫屋敷となっていることから、当初から重臣の屋敷地であったと考えられる。東側の裏手の溝からは、荒尾家の家紋入りの棟止瓦が発見され、絵図記載を発掘資料が裏付けている。

武家屋敷の礎石建物（第 33 次調

荒尾氏の家紋「九曜紋」の
刻まれた鬼瓦
（第 33 次調査出土）

また、第 1 次調査地では、時期は定かでないが土塀の基礎と考えられる低い石組みの屋敷境界や堀割が発掘されている。堀割は、幅 9.5m、深さ 1.8mの石積みで、北へ伸びていた。西側に二段の石段があり、船着場として利用されていたと考えられる。このような堀割水路は絵図には記載のないものである。

その他、第 29 次調査地では､中海に面した堤防跡や舟入も確認されており、中海に近い屋敷地の施設の姿が確認されている。

また、第 7 次・8 次調査地では、前述の石垣積みの大規模水路でなく、屋敷の裏手や境界付近に幅 4～7m前後の水路状の大溝が確認されている。これは下水路や運搬用小水路と考えられ、外郭の武家屋敷地には水路が縦横に巡らされていたと推察される。そして、これらの水路に、屋敷地内で発見される多くの小溝が取り付き、排水処理を行ったと考えられる。絵図には記載がないが、これらの溝や水路は武家屋敷地の生活維持に重要な役割を担った施設と考えられる。

水路全景（米子城跡№1 遺跡）

この他、素掘り、石積み、木枠、曲物、桶等、多様な形態の井戸が数多く発見されている。米子城下の地層は砂層が卓越しており、浅いところでも良い水が出る環境であったと推測できる。また､井戸に似た形態の桶底の土坑が発見されており、便所の可能性が指摘され寄生虫分析がなされたが、便所である裏付けの分析結果は確認されていない。

３）遺物でみる城下の暮らし

①暮らしを語る遺物

米子城下からは遺構に伴って、大量の生活遺物が発見されている。出土した遺物は、当時の武家屋敷等で使用され廃棄された生活用具である。また、これら出土品には植物製の有機質遺物は少なく、食膳用の陶磁器類が大半を占めている。陶磁器類

米子城跡で出土した遺物

は肥前系の陶磁器が主体で、椀・皿・鉢・壺・甕・瓶・盃・蕎麦猪口等で現代の食膳用具と変わりないものである。また、漆椀・盆・折敷・箸等の木製品もある。炊飯調理具としては、羽釜・土鍋・焙烙・桶・曲物・柄杓・擂鉢・下ろし金・切匙・包丁・砥石等があり、このうち、擂鉢と焙烙が数的には目立つ。豆類等の雑穀を炒ったり､磨り潰した調理が多かったことが推測される。

ほかに櫛・笄・紅皿などの装身具や、物指・硯等の文具、行灯取手・灯明台・灯明皿等の灯具、羽子板・独楽・碁石・人形等の玩具、その他に毛抜き・耳掻き・かみそり・煙管・下駄・帯等、様々なものがあり、当時の日常の暮らしの一端を実物で物語っている。

また、食物残滓として投げ捨てられた貝溜り等の土坑から、動物遺存体が発掘されており、当時の食生活や動物相の一端が覗える。動物類としては鹿・猪・牛・犬・鳥・スッポン・カエル・イルカ等があり、魚類としてスズキ・タイ・フグ・マグロ・イワシ・ヒラメ等がある。貝類としては、サルボウガイ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリ・岩牡蠣・サザエ・アワビ・バイ・ウミニナ等が見られ、中でもサルボウガイは最も多量に出土していることから、中海で恒常的に採取され食されていたと推測される。

②進物の品々

出土遺物のうち、特筆すべきものに木荷札がある（附編参照)。米子城第 8 次調査の 17～18 世紀代の湿地堆積層から発見された荷札は、表に「小原右衛門様　池田孫之進」、裏に「塩小鯛三十　池田孫之進」と墨書される。その他に、表「小原平右衛門様　松崎八郎ヱ門」裏「鱈二つ」、「鳩五つ　奥村萬衛門」「四斗六升五合」、米子城跡第 7 次調査では、表「見随院様香物　源六」裏「もろげえび」、表「見随院様　香物　源六」裏「鯛三つ」等の記述があり、魚類を進物類として届けた武士間の私的やりとりを垣間見ることができる荷札である。小原平右衛門の名は『荒尾成文家家譜』の慶安 2 年(1649)の分限帳に 300 石取りの家臣にその名を見ることができる。その他の武士名については文献では確認できない。

木簡出土状況（第 8 次調査）

４）発掘調査成果から見る米子城跡の変遷

近世の調査においては、大量に出土する陶磁器類の組み合わせを時期の指標としている。米子城下では、備前系の擂鉢、壺、甕、肥前系の椀、皿等の陶器に中国・朝鮮の陶磁器と瀬戸・美濃系の陶器、在地の土器小皿等が出土する層を 16 世紀後半～17 世紀初頭とし、若干の肥前系磁器に唐津等の肥前系陶器が多い組み合わせを 17 世紀前半と位置付ける。

久米第１遺跡の整地盛土
（縄文以来のシルト層に黄色の埋立土が盛られている。）

そして肥前系陶磁器が主体で、磁器の割合が増加してくる時期を 17 世紀中～後半、肥前系磁器が多くなり、平戸系の半磁器が混じってくる時期を 17 世紀末～18 世紀後半、18 世紀後半以後は、陶磁器の出土数が最も多くなる時期で、在地の陶器や布志名焼、石見焼も加わり、器種も増えてくる。

これらを基準に整備と変遷をみると、内膳丸下の久米第 1 遺跡では、15 世紀後半から 16 世紀後半にかけて段階的に埋立造成等の基礎的な整備が進んでいることから、少なくとも吉川氏の近世城郭築城以前の段階で、既に相応の城砦施設は配置されていたとみられる。

16 世紀末～17 世紀初頭の吉川氏の時期には、米子城跡第 1 次調査地では、第五層から井戸、第 4 次調査地では溝、第 33 次調査では掘建柱礎石建物跡等が検出されていることから、近世城郭築城当初の段階では、城郭と内堀に近い中海側は整備されていたことが推測できる。

17 世紀前半の中村氏、加藤氏、池田氏の時期には、第 4 次調査、第 25 次調査において屋敷区画溝が、第 27 次調査で溝・土坑・井戸が、第 33 次調査で礎石建物跡等が検出されており、城下町の整備はかなり進み、惣構は完成したものと考えられる。なお、第 7 次調査では屋敷施設の廃棄跡が確認されている。これは藩主の国替えによる石高の減少による屋敷地の衰退の可能性が示唆されている。

17 世紀後半～18 世紀の荒尾氏の時期は、遺物出土量が少なく、全体的に屋敷地の荒廃が進む。絵図資料にも「廃宅」や「陸地」の記載がみられる（『伯耆国米子平図』（宝永 6 年(1709)4 月 9 日）。第 4 次調査でも粗砂が堆積する空地の様相が検出された。しかし、18 世紀後半になると、第 1 次調査で掘割、第 7 次調査、27 次調査で溝・土坑等が検出され、遺物出土量も増加するため、武家屋敷地において再開発が行われたものと考えられる。

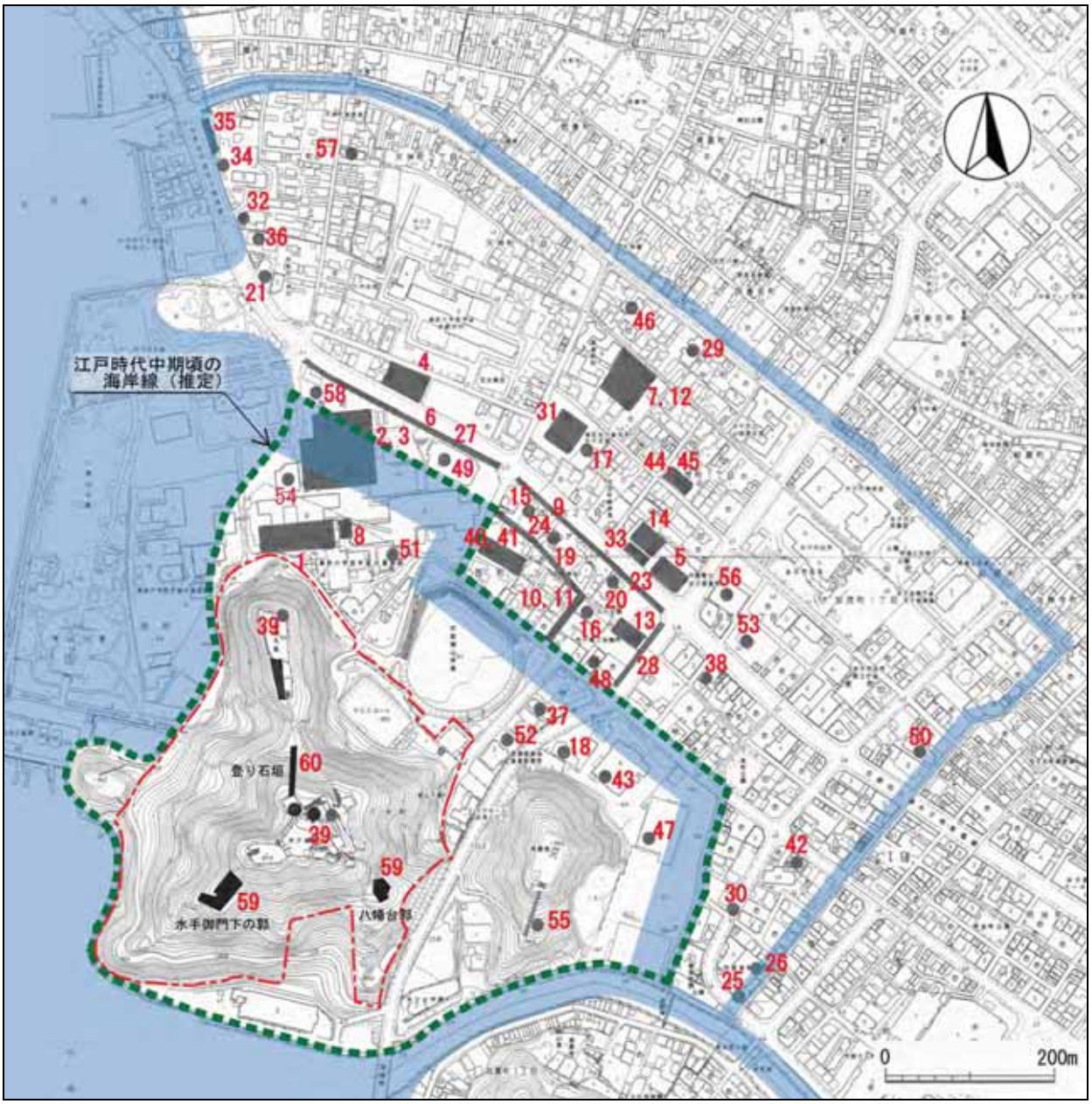
第１表　既往の発掘調査　（№は下図№と対応、網掛けは本調査、関係報告書名については附編参照。）

№	名　称	所在地	原　因	調査期間	調査面積	遺　構　等	地 区
1	**久米第１遺跡**	久米町 89 番地	鳥取大学医学部附属病院新営工事	1988 年 5 月～8 月	1,600 ㎡	井戸（素掘り、石組、桶枠、井桁組）、溝、土坑、建物跡（掘立、礎石）、石垣、石列、礫敷遺構、土塁、柵列	城内
2	**米子城跡 1（第 1 次）**	西町 36 番地-1	鳥取大学医学部附属病院再開発事業（診察棟建設）	1992 年 10 月～11 月 1992 年 12 月～1993 年 2 月	2,500 ㎡	内堀跡、屋敷境界（溝、石積）、堀割状遺構、建物跡（掘立）、土坑、暗渠排水、排水施設、井戸、貝溜り	城内、内堀、城下町
3	**（試掘調査）**	西町地内	鳥取大学医学部附属病院改築工事	1992 年度	51 ㎡	溝、焼土跡、整地面	城内
4	**米子城跡 2（第 2 次）**	西町 78・79 番地	ガソリンスタンド新設工事	1993 年 8 月	100 ㎡	土坑、土器溜り、屋敷境界、溝、柱穴、井戸状遺構	城下町
5	**米子城跡 3（第 3 次）**	加茂町 2 丁目 51 番地	中国電力米子営業所新築工事	1993 年 11 月～1994 年 2 月	600 ㎡	16 世紀末 17 世紀初頭～幕末の溝、建物跡、井戸、土坑。唐津、伊万里、備前焼、灯明皿、鉛玉、漆継ぎ	城下町
6	**（試掘調査）**	西町地内	県道米子駅境線道路改良工事	1993 年度	98 ㎡	石列、瓦溜り	城下町
7	**米子城跡 4（第 4 次）**	加茂町 1 丁目 16 番地	マンション建設	1994 年 10 月～11 月	240 ㎡	16 世紀末から 17 世紀前半期の溝、土坑、石列（溝の上に重複）、瓦溜り、沼沢状地形	城下町
8	**米子城跡 5（第 5 次）**	西町 36 番地－1	鳥取大学医学部附属病院配水モニター、防火水槽、共同溝工事	1994 年 11 月～12 月	253 ㎡	北東へ下降傾斜する崖錘性堆積	城内
9	**米子城跡 6（第 6 次）**	西町 36 番地－4	県道米子駅境線道路改良工事	1994 年 4 月～1995 年 6 月	6,006 ㎡	溝、井戸（桶枠）、土坑、貝溜り。井戸や土坑状遺構に貝を廃棄。木簡出土	城下町
10	**米子城跡 7（第 7 次）**	加茂町地内	米子駅境線沿道土地区画整理事業区画道路新設工事	1994 年 8 月～12 月 1995 年 6 月	1,245 ㎡	貝塚、溝、土坑、柵、井戸（石組、桶枠）、庭園状遺構（玉石、飛び石）、敷地境界溝。内堀傍の土坑から進物木簡出土	城下町

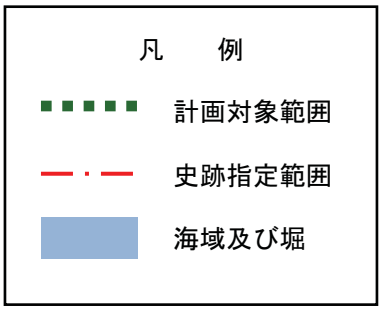
No.	名　称	所在地	原　因	調査期間	調査面積	遺　構　等	地 区
11	（試掘調査）	西町地内	市道新設工事	1994 年度	72 ㎡	石列、瓦溜り	城下町
12	（試掘調査）	加茂町地内	マンション建設工事	1994 年度	32 ㎡	遺構なし、陶磁器出土	城下町
13	米子城跡 8（第 8 次）	加茂町 2 丁目 16 番地－1	米子駅堰境線沿道土地区画整理事業米子商工会議所建替工事	1995 年 1 月～4 月	560 ㎡	溝・水路、石列、堰、土坑。進物木簡、土砂船免札、木札、三味線棹、独楽、羽子板	城下町
14	米子城跡 9（第 9 次）	加茂町 2 丁目 54 番地	中国電力米子中央変電所新設工事	1995 年 6 月～10 月	915 ㎡	17 世紀前半～幕末の屋敷境界溝、土坑、柵列、井戸（石組）	城下町
15	第 10 次調査（試掘調査）	加茂町 2 丁目 26－4	ビル新築工事	1995 年度	11 ㎡	遺構・遺物なし	城下町
16	第 10 次調査（試掘調査）	久米町 40 番地－7	保育園新築工事	1995 年度	49 ㎡	溝、陶磁器出土	城下町
17	第 11 次調査（試掘調査）	西町 62 番地	鳥取地方裁判所米子支部改築工事	1995 年度	48 ㎡	井戸、陶磁器、瓦出土 現地表下 0.8～1.0mに近世遺構が残存	城下町
18	第 12 次調査（試掘調査）	久米町 55 番地－2	ビル建築工事	1996 年度	12 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
19	第 13 次調査（試掘調査）	加茂町 2 丁目 26 番地	住宅及び医院建築工事	1996 年度	14 ㎡	弥生土器出土 近世の遺構・遺物なし	城下町
20	第 14 次調査（試掘調査）	加茂町 2 丁目 24 番地	教会及び住宅建築工事	1996 年度	44 ㎡	須恵器出土 近世の遺構・遺物なし	城下町
21	第 15 次調査（試掘調査）	内町 124 番地－16	県道米子駅境線道路改良工事	1996 年度	24 ㎡	粗砂、細砂検出（海岸の様相）	城下町
22	第 16 次調査（試掘調査）	西町 20 番地	県道米子駅境線道路改良工事	1996 年度	64 ㎡	土坑。弥生、古墳、平安、近世の遺跡が散在すると考えられる。	城下町
23	第 17 次調査（試掘調査）	加茂町 2 丁目 16 番地	県道米子駅境線道路改良工事	1996 年度	144 ㎡	現地表下 0.7～1.0mに遺跡が存在する可能性が高い。	城下町
24	第 18 次調査（試掘調査）	加茂町 2 丁目 26 番地－5	ビル建築工事	1996 年度	4 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
25	第 19 次調査（試掘調査）	東町	都市計画道路末広町東町線工事	1996 年度	40 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
26	第 20 次調査（試掘調査）	東町 71 番地	マンション建築工事	1996 年度	9 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
27	米子城跡 21 遺跡	西町、加茂町	県道米子駅境線道路改良工事	1997 年 4 月～11 月	8,059 ㎡	建物跡、井戸、土坑、溝、貝溜り、土器溜り、木簡出土	城下町
28	米子城跡 22（第 22 次）	加茂町 2 丁目	国道 9 号電線米子地区電線共同溝建設工事	1997 年 11 月～12 月	130 ㎡	屋敷と道路との境界溝、土坑、石列	城下町
29	第 23 次調査（試掘調査）	中町	住宅建築工事	1997 年度	18 ㎡	現地表下 1.1～1.4mに包含層、溝、ピットがあり、古代～中世を中心とする遺跡の存在が考えられる。	城下町

No.	名　称	所在地	原　因	調査期間	調査面積	遺　構　等	地 区
30	第 24 次調査（試掘調査）	東町	都市計画道路改良工事	1998 年度	24 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
31	第 25 次調査	西町 62 番地	鳥取地方・家庭裁判所米子支部庁舎新営工事	1998 年 8 月～12 月	1,288 ㎡	井戸（素掘り 10、木組 1、石組 2、曲物 1、桶 1）、屋敷境界溝、建物跡､柵列、埋設桶、木簡出土	城下町
32	第 26 次調査（試掘調査）	内町	県道米子駅境線道路改良工事	1998 年度	60 ㎡	江戸時代後期～末の杭列、護岸、旧海岸線を検出。	城下町
33	第 27 次調査	加茂町 2 丁目 54 番地	中国電力湊山変電所新設工事	1999 年 4 月～6 月	230 ㎡	水田跡、井戸（うち 1 基は今井家の井戸）、屋敷境界溝、溝、土坑、埋設桶、木簡	城下町
34	第 28 次調査（試掘調査）	内町	県道米子駅境線道路改良工事	1999 年度	22 ㎡	杭列、護岸 江戸時代後期～末に大規模な土地造成を行い、湊の整備を行った可能性あり	城下町
35	第 29 次調査	内町	主要地方道米子境港線（旧県道米子駅境線）道路改良工事	1999 年 6 月～9 月	500 ㎡	堤防状遺構、舟入遺構（為替蔵の設置に伴う）	城下町
36	第 30 次調査（試掘調査）	内町	検察庁官舎改築工事	1999 年度	20 ㎡	明治期以降の埋立層あり、明治以前には海岸であった	城下町
37	第 31 次調査（試掘調査）	久米町	マンション建築工事	1999 年度	36 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
38	第 32 次調査（試掘調査）	加茂町	マンション建築工事	2000 年度	8 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
39	（試掘調査）	久米町	鳥取県西部地震災害復旧工事	2000 年度	11 ㎡	石垣の基礎部分の調査で、大型の石が根石として使用されていた。瓦が多量に出土	城内
40	第 33・36 次調査	西町所在	マンション建設	2001 年 6 月～9 月	950 ㎡	17 世紀初頭以降の掘立柱建物、礎石建物、井戸、石組、水路跡、埋甕、畦状遺構、溝、土坑、畑状遺構、石垣。江戸前期は礎石建物 1、掘立建物 1～4、後期は礎石 2、石組遺構。家紋瓦	城下町
41	第 33 次調査（試掘調査）	西町	マンション建築工事	2001 年度	10 ㎡	溝、建物跡	城下町
42	第 34 次調査（試掘調査）	東町	アパート建築工事	2001 年度	16 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
43	第 35 次調査（試掘調査）	久米町	ホテル建築工事	2001 年度	52 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
44	第 37 次調査（試掘調査）	加茂町	マンション建築工事	2001 年度	28 ㎡	既存の建物によりやや改変を受けているが、近世の遺跡が残存すると推定される。	城下町
45	第 38 次調査	加茂町 1 丁目	マンション建築工事	2002 年 4 月	274 ㎡	建物跡、柵列、溝、井戸、土坑	城下町
46	第 39 次調査（試掘調査）	中町 80 番地－1	マンション建築工事	2002 年度	12 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
47	第 40 次調査（試掘調査）	久米町	ショッピングセンター建築工事	2002 年度	12 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
48	第 41 次調査（試掘調査）	久米町 32 番地	マンション建築工事	2003 年度	71 ㎡	建物跡、屋敷境界溝、溝、土坑	城下町
49	第 42 次調査（試掘調査）	西町	立体駐車場建築工事	2006 年度	8 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町

No.	名　称	所在地	原　因	調査期間	調査面積	遺　構　等	地 区
50	**第 43 次調査（試掘調査）**	東町	マンション建築工事	2006 年度	6 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
51	**第 44 次調査（試掘調査）**	西町 86 番地	鳥取大学医学部附属病院改築工事	2007 年度	12 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
52	**第 45 次調査（試掘調査）**	久米町 133 番地－1	建物建築工事	2008 年度	9 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
53	**第 46 次調査（試掘調査）**	加茂町 2 丁目 130 番地	コンビニエンスストア建築工事	2008 年度	27 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城下町
54	**第 47 次調査（試掘調査）**	西町	病院増築工事	2009 年度	16 ㎡	既存建物により遺跡は消滅	城内
55	**第 48 次調査（試掘調査）**	久米町 226 番地－1	テレビ送信設備整備工事	2010 年度	7 ㎡	盛土中から近世瓦片が出土	城内
56	**第 49 次調査（試掘調査）**	加茂町 2 丁目 100 番地－1	店舗建設工事	2011 年度	42 ㎡	陶磁器が出土したものの、後世の開発によって遺跡は消滅か？	城下町
57	**第 50 次調査（試掘調査）**	内町 57 番地	アパート建設工事	2011 年度	6 ㎡	陶磁器が出土したものの、後世の開発によって遺跡は消滅か？	城下町
58	**第 51 次調査（試掘調査）**	西町 36 番地－1	自家発電設備設置工事	2012 年度	18 ㎡	古墳時代後期～古代と考えられる溝、ピットを検出	城下町
59	**遺構確認調査**	久米町	米子城跡整備授業に伴う遺構確認調査	2015 年度		城内 2 か所で新たな郭を確認	城内
60	**遺構確認調査**	久米町	米子城跡整備授業に伴う遺構確認調査	2016 年度		登り石垣の確認	城内



史跡米子城跡周辺の発掘調査位置図



（５）石垣調査

米子城の石垣を備えた本格的な普請は、戦国時代末期の天正 19 年(1591)頃に西伯耆の領主となった吉川広家により始まったと言われ、関ヶ原の戦い後、代わって領主となった中村一忠により慶長 7 年(1602)頃に完成したと言われている。

米子城跡は、湊山の地形を巧みに利用した石垣による縄張りが良好に遺存しており、山頂部の本丸と内膳丸は全て石垣で構築され、石垣により虎口や枡形を構成している。特に本丸東側は天守台石垣の控え石垣が 2 段あり、四重櫓石垣と一体となって米子城跡の特徴的な景観を形づくっている。

一方、山裾の二の丸には高さ 10m程度の石垣がある。この石垣の前面は湊山球場の外野スタンド造成による盛土がされているため、本来の石垣高は 15m程度と推定される。また二の丸入口には、石垣により枡形虎口が構成されている。

石垣修理の記録については、17 世紀後半から 19 世紀代にかけての石垣修理願絵図が残存している（第 3 章 第 2 節参照)。近年は昭和 57～59 年度(1982～1984)に、石垣の崩落に対応するための積み直しと、平成 12 年(2000)に発生した鳥取県西部地震で被災した石垣の復旧工事を平成 13 年度に実施した（第 6 章 第 3 節参照)。

さらに近年の発掘調査で、米子城修復工事時の石材加工場と考えられる八幡台において築城初期と推定される石垣や、内膳丸から本丸の遠見櫓にかけての「登り石垣」を検出する等、米子城跡の石垣調査、研究が進んでいる。

米子城跡の石垣は、米子城の変遷を示す貴重な遺構であり、多様な石垣を通して「歴史の証拠」を体感することができる。主な石材は、安山岩、石英安山岩、凝灰角礫岩で、石積み技法は、野面石による「野面積み」、割石や切石による「打込ハギ」「切込みハギ」が見られる。その他、「布崩し積み」、「谷落し積み」が見られ、「隅角部の算木積み」、地形を活かした「シノギ角」も見られる。また天守鉄御門跡付近には矢穴の残る岩盤露頭があり、湊山の山腹には石材採掘跡と推定される窪地や石垣修理時の石材加工場も残存している。また枡形には矢穴の穿孔過程を示す石垣もある。

現在、石垣の保全と眺望の観点から、伐採を含めた樹木管理を実施しているが、石垣前面や天端、石垣面に生育している樹木もあり、石垣保全のため、さらに樹木管理を進める必要がある。また石材の欠落、孕み出し箇所もあるため、貴重な遺構である石垣の日常的な観測、維持管理、危険箇所の把握の観点から、石垣基礎調査（石垣カルテ等の作成）が必要となっている。

本丸東側の石垣

天守台石垣と控え石垣

天守台石垣
打込みハギ、布崩し積み　隅角部：算木積み

四重櫓台石垣（幕末に積み直し）
切込みハギ、谷落し積み　隅角部：算木積み

本丸への枡形虎口（鉄御門跡）

表御門二重櫓跡石垣
打込みハギ、布崩し積み　隅角部：算木積み

水手御門櫓跡石垣
打込みハギ、布崩し積み

内膳丸石垣
打込みハギ、布崩し積み　石垣面に樹木

二の丸石垣
打込みハギ、布崩し積み

二の丸石垣
隅角部：算木積み

二の丸石垣　　シノギ角

二の丸石垣
打込みハギ、布崩し積み　隅角部：算木積み
石垣天端際に樹木

二の丸石垣（枡形）
打込みハギ、布崩し積み　隅角部：算木積み

二の丸石垣
打込みハギ、布崩し積み　隅角部：算木積み

四重櫓台に残る「忘れ石」

矢穴痕が残る岩盤露頭

石材の欠落、孕み出し

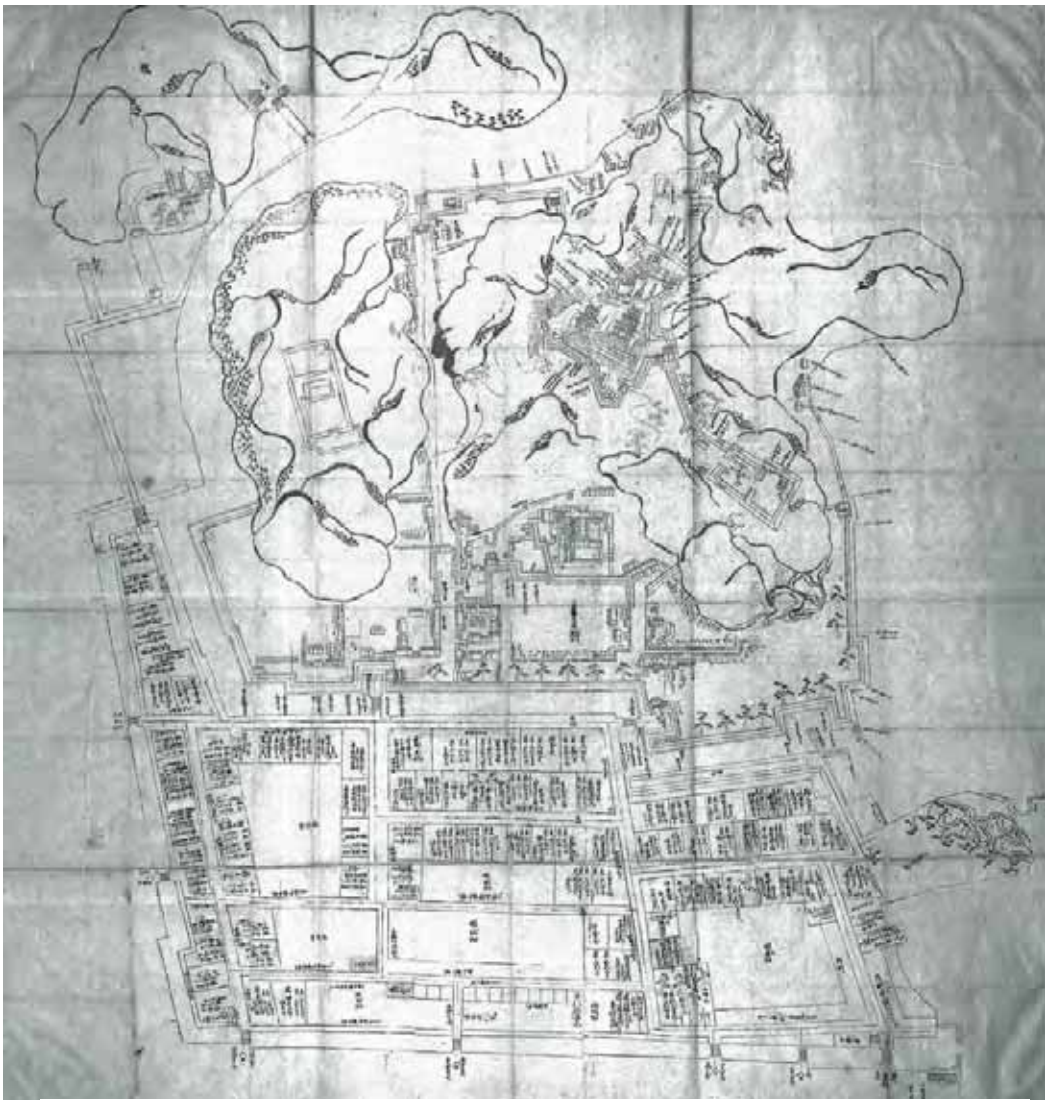
石垣前面に樹木

２米子城の構造

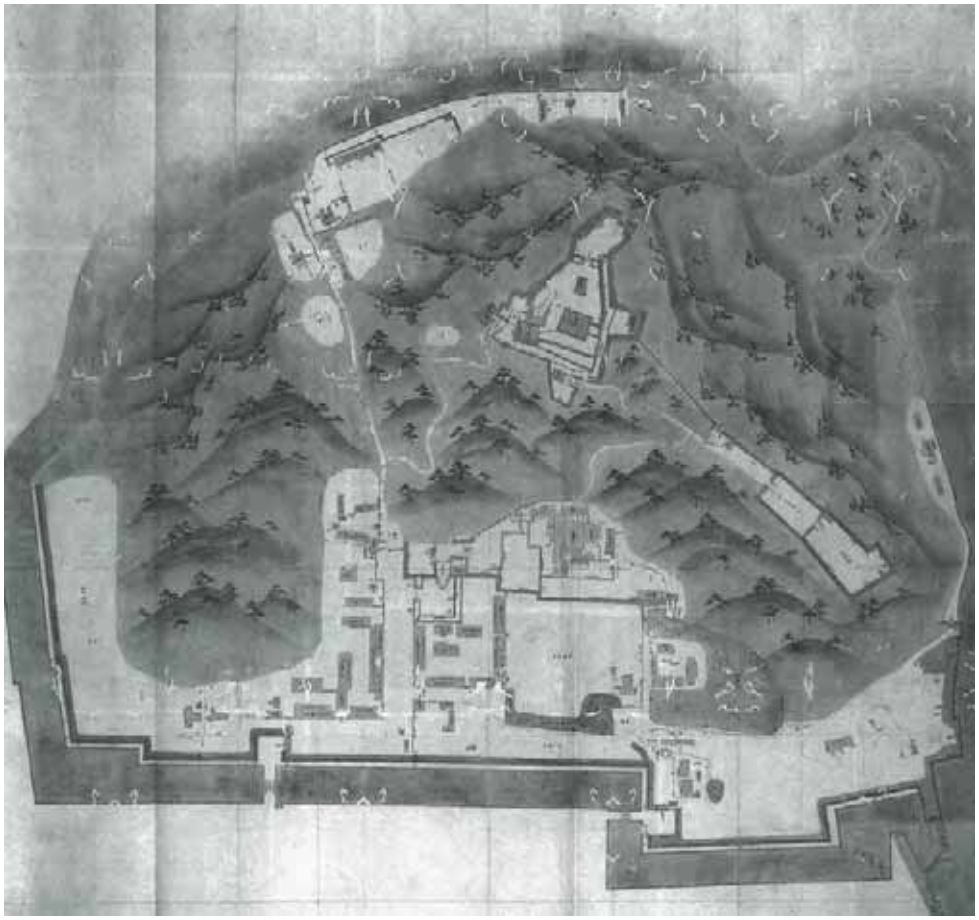
米子城は、標高 90.1mの湊山頂上の天守を中心に、北に内膳丸（丸山）、東に飯山を出丸として、中海から水を引き込んだ内堀と中海で取り囲まれた地域に様々な郭を配置し、さらに外堀を巡らし、内堀と外堀の間に武家屋敷を配していた。城郭中枢部は、本丸、内膳丸、二の丸、三の丸、深浦（御船手）郭、飯山等の郭で構成され、その様子は藩政時代に描かれた多くの米子城絵図や遺構によって知ることができる。

米子城下町航空写真

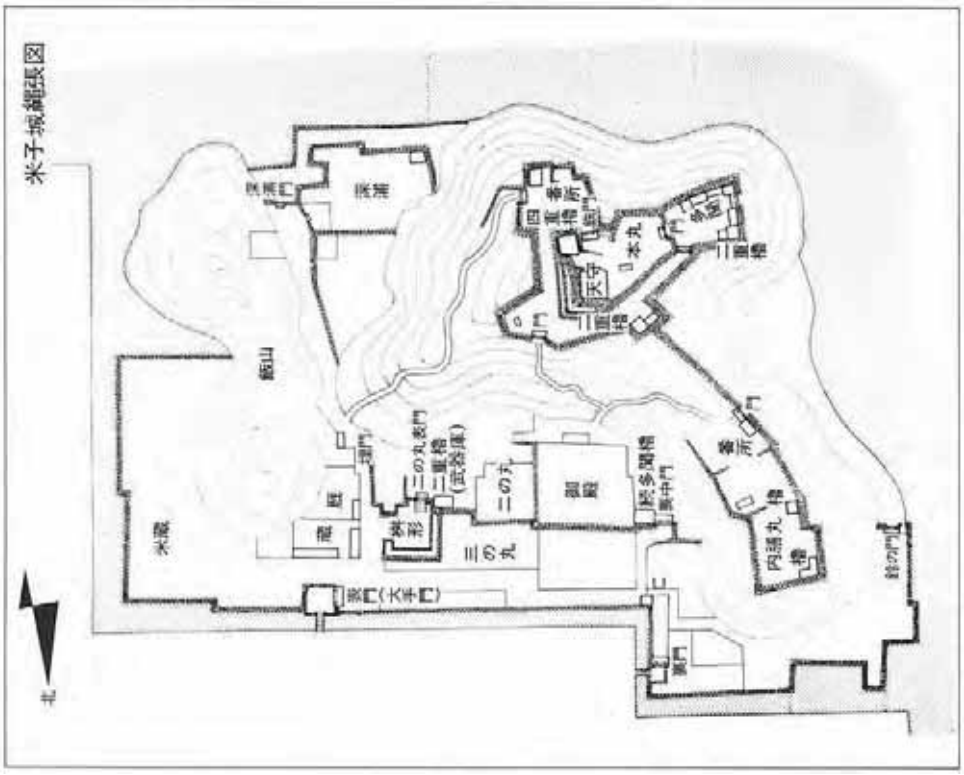
米子城跡本丸全景（東から）



米子御城下図（鳥取県立博物館蔵）



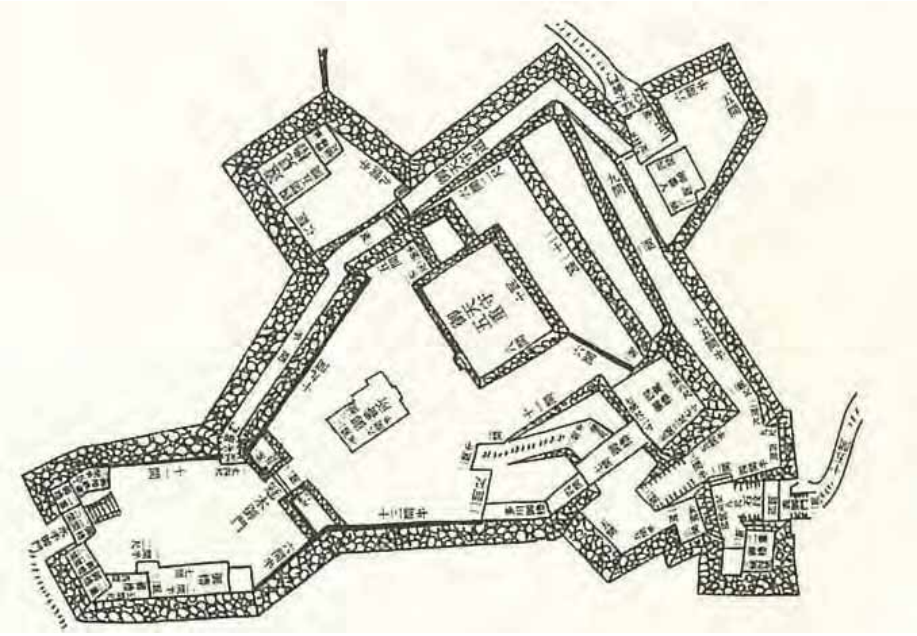
米子御城絵図（江戸末期）（鳥取県立博物館蔵）



米子城縄張り図（小松和博 1989「米子城」『探訪ブックス山陰の城』（小学館）より）

（１）本丸

湊山山頂部に高石垣で囲った天守郭、水手郭、遠見郭、番所郭から構成されている。天守郭は、東側に２段、北側に１段控え積み郭を持ち、天守台、四重櫓台を配し、五重天守、四重櫓、鉄門櫓、多聞櫓、番所、冠木門を持ち土塀を巡らしていた。水手郭は多聞櫓、続二重櫓、水手門、門外にも２つの外郭を持つ。遠見郭は、天守郭の北下段にあり遠見櫓、二重櫓が配していた。番所郭は天守郭の東下段にあり番所、蔵を配する。その他に鉄門南下段に虎口を配し、冠木門に二重櫓を配していた。



本丸縄張図『伯耆米子城』（立花書院）より

伯州米子之図（本丸を拡大）

伯耆国米子城絵図（天明２年(1782)）の一部を拡大

米子城御天守東北側破損絵図

米子城四重御櫓弐拾分一之図

本丸の石垣

天守台の石垣と控え石垣

四重櫓台

四重櫓台の石垣

天守の礎石

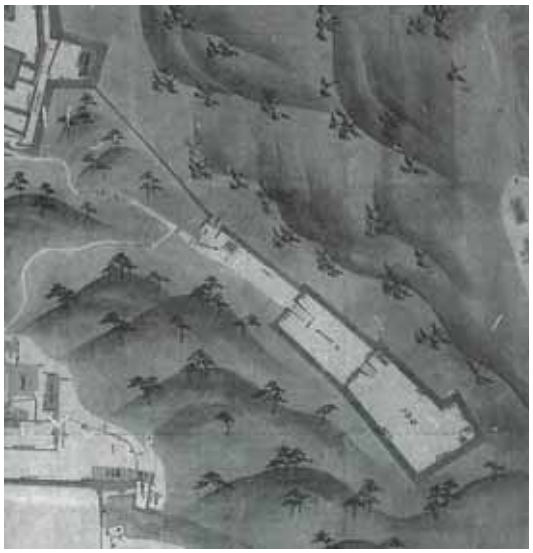
冠木御門付近の石垣

（２）内膳丸

丸山に築かれた郭で、2 段に配置された一の段郭、二の段郭から構成されている。中村一忠の家老横田内膳村詮が監督してつくったと伝承があるため、「内膳丸」と呼ばれる。また、「二の御丸」と記された絵図もある（米子御城明細図）。二の段郭には角櫓、蔵が置かれていた。

また、この郭から本丸へ向けて、登り石垣を設け、西の防衛線が築かれていた。近年の調査の結果、内膳丸石垣には改変された箇所が多く確認されたが、絵図資料にはその変遷は描かれていない。

伯州米子之図（内膳丸を拡大）



米子御城絵図（内膳丸を拡大）

内膳丸

内膳丸から本丸を望む

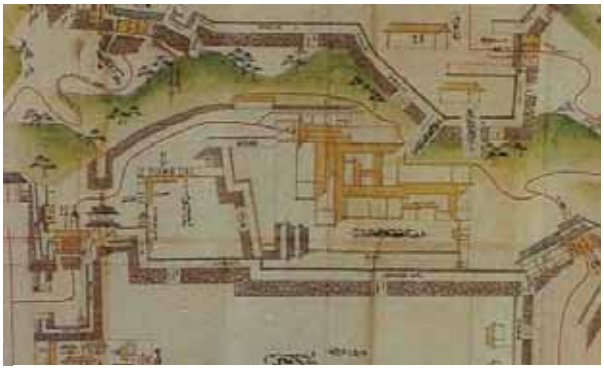
門付近の石垣

遠見櫓下に続く登り石垣

（３）二の丸

湊山北裾に高石垣で囲った２段の郭と枡形入口、虎口で構成される。枡形入口側の表中御門に冠木門と二重櫓を配する。上段の郭には城主居住の御殿と武器庫、侍部屋等の付属建物が置かれた。裏門側には櫓門と続多聞櫓を置く。

裏側の裏中御門は太鼓御門と呼ばれ、2 階に大太鼓が置かれ、時刻や非常召集を告げたという。幕末、文久年間、松江藩の蒸気船八雲丸が三柳沖に現れた時に、この太鼓が鳴り渡り、米子組士達は枡形へ駆けつけたといわれている。


伯州米子之図（二の丸を拡大）

米子御城絵図（二の丸を拡大）

二の丸石垣

枡形入口

枡形

枡形二重櫓台

（４）三の丸

二の丸北側にあり、飯山、湊山、丸山の北側の内堀と石垣で囲った郭で、内掘の北と東の外側の広い敷地を外堀で囲った郭である。大手門、搦手門、鈴門を配す。表御門、裏御門ともに枡形が配されており、多聞櫓が築かれていた。

大手門を入った中央部（現湊山球場）には、荒尾氏の屋敷、番士詰所、作事方詰所、作事小屋、米蔵、蔵屋敷などの施設が置かれていた。飯山麓に材木蔵、大工小屋、馬屋などがあり、深浦側への狭隘部には埋門と天守への登城路があった。鈴門入口脇には番人小屋があり、その南側には鈴茶屋があり、家老荒尾氏はここで茶会を催している（「鹿島家文書」）。鈴門南側はすぐに中海となり、船着場の石段があった。荒尾氏は粟島参詣などの帰りにはここに御座舟をつけたと記されている。

また、内堀には、大手と裏門の 2 か所に橋がかけられていた。ただし、築城当初の様相は不明な部分が多い。

絵図の様相から見た近世の三の丸の変遷

現存する米子城絵図のなかで、最も古いものは、寛文 7 年(1667)に幕府への石垣修復願に付せられた絵図の写しである。絵図には、建物が 2 棟、また、これを取り囲む壁が描かれている。

元禄 3 年(1690)の絵図に描かれた城の景観も寛文 7 年(1667)の絵図とほとんど変化がない。

元禄 15 年(1702)に作製された絵図も元禄 3 年(1690)の絵図とほぼ同じである。

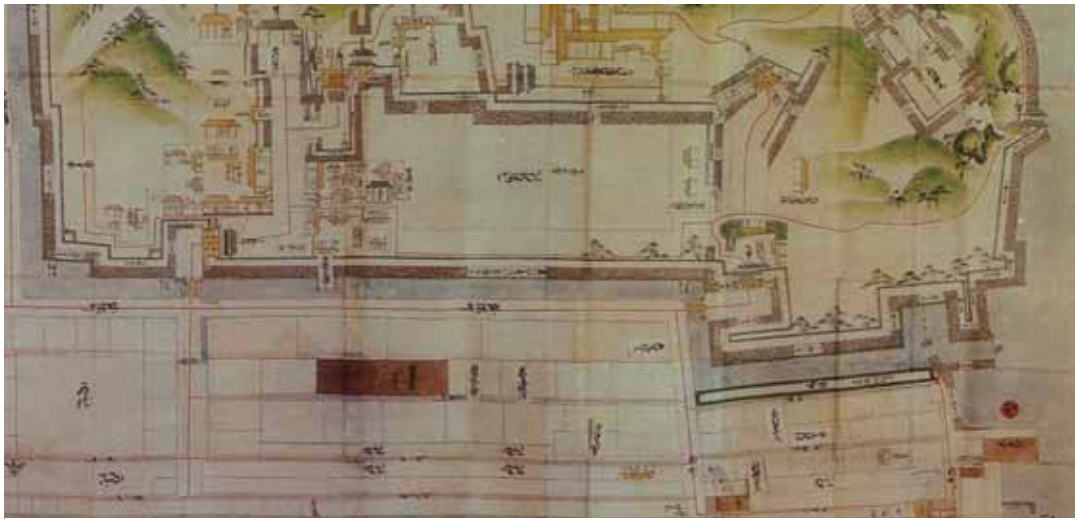
宝永 6 年(1709)には「廃宅荒尾一学」との記述が見られる。また、蔵屋敷等の記載もみられる。

享保 2 年(1717)の修復願図でも元禄 15 年(1702)図とほぼ同じ景観となっている。

元文 4 年(1739)の「米子御城明細図」では、「二の丸」部分に「荒尾河内屋敷」と記載がある。三の丸には、2 棟の建物が確認でき、また、三の丸東側部分には米蔵などの多くの建物が認められる。なお、「河内」を名乗るのは 5 代の荒尾成昭である。

明和 2 年(1765)頃からの絵図には、二の丸、三の丸についての建物は記載しない旨の指示が出されており、これ以降、嘉永元年(1848)までの絵図には建物の記載がない。嘉永 5 年(1852)から 2 棟の建物の記載が復活し、文久 3 年(1863)の絵図まで、三の丸の中心的な 2 棟の建物の記載がみられる。

これらのことから、少なくとも寛文 7 年(1667)から文久 3 年(1863)まで約 200 年間は、三の丸に 2 棟の建物（荒尾氏関係の建物か）が存在していたことが窺われる。また、三の丸東側部分（湊山球場の外野のセンターからレフトにかけて）には、蔵屋敷、米蔵等の建物が認められる。



伯州米子之図（三の丸を拡大）

（５）深浦（御船手）郭

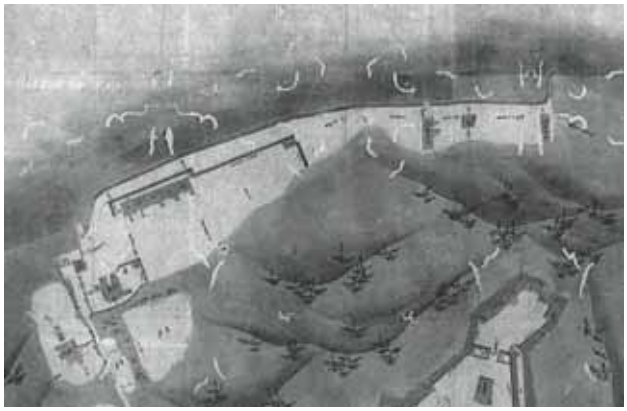
湊山の南山裾の中海深浦に面した郭で、御船手郭が設けられ、藩の御船手の役所と船頭詰所があり、角櫓が配置され、主として西伯耆一帯の海事の監督にあたった。ここには深浦御門が築かれ中央部は 2 段の石垣で囲われ、その上段には櫓が配されている。下段の石段下には船着場があり、深浦から出山に至る海岸部には、船小屋、番人小屋などの施設が設けられていた。さらに深浦から飯山麓にかけては御船頭屋敷が 2 軒建てられ、小祠も 3 か所祀られている。

深浦は飯山城ができた頃からの海への出入り口であったようで、湊山、飯山の南側の湾入りが深い良港であったことから、米子湊に先行する港として吉川氏時代には朝鮮渡海に重要な役割を果たしたと考えられる。城主加藤貞泰は造船事業に力を注ぎ、元和 2 年(1616)には御召船駒手丸が進水、米子から大洲への国替えには大船団で移動している。

江戸時代、深浦には番所が置かれる。この番所は、米子城の海からの防衛陣地であったばかりでなく、深浦番所の役人は、米子近くの日本海や中海で船の遭難があったときには現場に出向いての調査や、外国船への警戒にあたるなど軍港的な責任を負っており、加茂川口の川口番所等と仕事を分担していた。寛文 5 年(1665)、藩は荒尾氏の了解をとって深浦番所を強化し、藩船の滞留場を設け、藩船の修造、渡船の配給を行い、藩の御船手役所の命ずる船頭が米子組士から選ばれた。幕末になって海岸防備が重要視されると、藩からさらに船頭の応援をつとめさせたりしたが、文久 3 年(1863)にはその番所を淀江に移し、深浦番所専官海区は汗入郡塩津（中山町）から西原（淀江町）とした。

また、深浦港は幕末の四重櫓改修の折に石垣の石材を運び上げるのにも使用されている。鹿島家文書の四重櫓改修日記によれば、ここから荷揚げした石材を八幡台まで運び上げたという。

伯州米子之図（深浦御船手を拡大）



米子御城絵図（深浦御船手を拡大）

米子城裏絵図（鳥取県立博物館蔵）

（６）出山

湊山西側の中海に張り出した郭である。江戸期の資料にみられる出山の構造物については、出山上に砲壇 2 か所が描かれている絵図がある（米子御城平面図・米子市立山陰歴史館所蔵）。これは海岸防備の必要の高まる江戸時代末期の絵図と考えられる。鳥取藩が米子城内に台場を設けたという記事はなく、荒尾家によって独自に築かれた砲壇と考えられている。

米子御城平面図（出山部分を拡大）

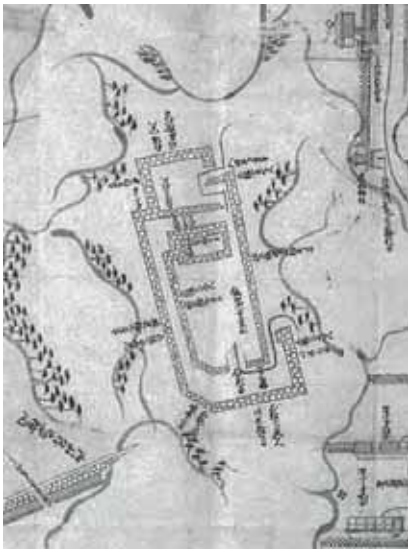
（７）飯山

飯山頂に築かれた独立した郭である。高石垣で 3 段に築かれた郭で、2 段目は帯郭状になっている。上下段とも、北東隅は角がとられているが、これは鬼門除けの可能性も考えられる。ただし後世の改変が大きく、詳細は今後の調査に委ねるものである。

飯山に砦が築かれたのは、500 年以上前の応仁の乱の頃とも伝えられている。戦国時代の攻防の後 16 世紀後半になると、毛利氏が次第に攻め入り、永禄 9 年(1566)に尼子氏が降伏すると、毛利方の武将福頼氏（淀江地方の小城主）などが城を守ったようである。

吉川広家が湊山中心の城づくりにかかると飯山は「東之丸」とされたようで、その後米子城主となった中村氏は、家臣の野一色采女（のいしきうねめ）に飯山を守らせたので「采女丸」とも言われた。飯山は慶長 8 年(1603)の「米子城騒動」の時に、横田内膳村詮の一族家来が立てこもって反抗し、出雲から堀尾氏の援軍を得て反抗軍を破ったと伝えられている。現存する絵図には建物の描写はなく、米子城騒動以後、建物は構築されていないことが推測される。

伯州米子之図（飯山を拡大）



米子御城明細図（飯山を拡大）

（８）外郭

米子城の惣構は、前述の（１）～（７）の区域を中海から水を引き込んだ内堀と中海で取り囲み、その外側には武家屋敷を配し、外堀を巡らし、外堀外側に町屋や寺町を配して、防御性と商業の利便性を兼ね備えた同心円的な構造となっている。家臣団は城山下の内堀と外堀の間に、東西約１㎞、南北約 380ｍ、広さにして約 38 町歩ばかりの居住区に生活した。

一方外堀外側の町屋では中海に繋がる外堀の水運を利用して商業が発展する。この居住区は近世を通して変わることはなかった。

伯耆国米子平図（宝永６年(1709)）

湊山金城米子新府（享保５年(1720)）

米子之図

米子御城下図

３米子城の変遷

大政奉還後、明治 2 年(1869)に米子城は鳥取藩家老職、荒尾成富から藩庁へ引き渡される。明治 4 年(1871)の廃藩置県で鳥取県となり、明治 5 年(1872)、藩主に公債の発行を願った士族小倉直人らに、その代償として払い下げられたが持て余され、米子町に買い取りを交渉したが許されず、翌明治 6 年(1873)には、城内の建物の大半は切り売りされ、この時天守等は尾高町の山本新助が購入する。明治 12 年(1879)頃、天守の取り壊しが始まる。明治 25 年(1892)頃、湊山・飯山の北側は荒尾成政の所有地、飯山南側・湊山本丸は小倉直人の所有地、湊山西面は児島喜平の所有地であった。これを米子町に売却し、売却金半額を町に寄付する話が持ち上がるが進展せず、その後数年にして、ほとんどが坂口家の所有となった。

明治 5 年頃の米子城か（写真の裏書による）
（村河春美枝氏所蔵）

明治 11 年頃の米子城（冨田公夫氏所蔵）

昭和 8 年(1933)、坂口家は湊山約 34,000 坪を米子市へ寄付し、これに基づき昭和 9 年(1934)に湊山公園整備計画が策定され、米子市もその他の民有地について買収を進めた結果、飯山や湊山の一部を除き、城跡の大半は米子市の所有となった。その後、昭和 31 年(1956)に、米子城跡は都市公園法に基づき「湊山公園」の一画となる。

昭和 37 年(1962)、鳥取県下の観光診断が実施され、観光開発の方針が明らかにされた。昭和 38 年(1963)には京都大学坂口名誉教授をリーダーとする調査団により、施設改善の要望が提出された。このうちのひとつとして、湊山城址の保存整備があげられている。これによれば、「山頂に至るドライブウェイ、リフトなどの必要はない。これは風致保護の面から、そうした施設とすることは好ましくない。むしろ整備すべき点は、山頂に至る専用歩道であり、山頂には展望台、休憩舎等を配置する程度とし、城址の史跡を生かすようにする」とある（『米子市四十周年史』）。これに基づき、登山道などの整備事業等が行われた。

昭和 52 年(1977)4 月 1 日、米子市文化財保護条例に基づき米子市指定史跡となった。

昭和 54 年(1979)、石垣の崩落が進んだため、石垣修理のための現況調査を実施し、昭和 57～59 年度(1982～1984)にかけて本丸の遠見郭、控え郭、本丸郭東、水手郭、内膳丸等の毀損の著しい箇所について、単市事業として解体、積み直しを行った。(単市事業　事業費 65,804 千円)

平成 12 年(2000)、鳥取県西部地震により石垣崩落等の被害を受け、平成 13 年(2001)に本丸の遠見

郭、番所郭、本丸郭北側、控え郭、水手郭、内膳丸を中心に崩落、孕み出し、亀裂などの毀損・危険箇所について都市公園の震災復旧工事として、石垣の積み直し等を行った。（建設省災害復旧事業196,000 千円）

平成 18 年(2006) 1 月 26 日に、文化財保護法に基づき、国指定史跡となった。

現在、国史跡、都市公園として市民の憩いの場として保存活用が図られている。

米子城山の弘楽園（明治 40 年 5 月 16 日）

米子城跡

城山の遠望（明治 40 年代）

城山から見た内町方面（明治終わり頃）

城山から見た米子の町なみ　『米子市史』第 13 巻資料編　写真

（１）本丸の変遷

明治 35 年(1902)、山頂の本丸跡に原牧場創設者の原文六が坂口氏と相計って天守に弘楽園をひらき、休憩所「富士見亭」を設け、そこで出されていたうば団子は名物となった。

天守台の石垣（『米子市四十年史』より）

大正 13 年(1924)、全山を禁猟区に指定、昭和 8 年(1933)12 月 20 日には坂口氏が約 34,000 坪を米子市に寄付する。昭和 10 年(1935)11 月より登城路を改修、天守台にベンチを施設し、ソメイヨシノを植栽する。昭和 39 年(1964)度、米子市観光協議会により、湊山の登城道路の整備が決定、これに基づき、米子市では市費 600 万円を計上し、現存する 3 本の登城道の整備や表示板・案内板の設置等を実施するとともに樹木雑草の伐採整備を行った。

（２）内膳丸の変遷

内膳丸（丸山）には、かつて坂東三十三観音、秩父三十四観音が置かれていたことから観音寺山とも呼ばれる。観音仏は明治期の米子城取り壊しの際、法蔵寺に移動された。なお、発掘調査では埴輪も出土しており、古墳時代後期の古墳が存在していた可能性がある。

内膳丸の休憩舎（『米子市四十周年史』より）

昭和 10 年(1935)11 月より、内膳丸登城路の改修、ソメイヨシノの植栽が行われた。また昭和 41 年度(1966)には、米子ライオンズクラブ、米子グレートライオンズクラブ、米子錦ライオンズクラブにより東屋が設置され、現況に至る。

（３）二の丸の変遷

明治 22 年(1889)の地図には、二の丸付近に「郭内」の記述が見られる。郭内とは、廃藩置県後に米子城内郭の地域に命名したもので、内堀の中、二の丸、三の丸を中心としたところにあたる。二の丸は城主御殿があったところであるが、取り壊されてからは梅林、竹藪等になっていた。

明治末年頃からは二の丸郭には木瀬、遠藤、三浦、小山氏の民家があり、明治 39 年(1906)、二の丸入口の枡形から表御門の付近には、米城焼窯（註 1）が開かれた。昭和 25 年(1950)4～5 月、現在の湊山球場を中心に、鳥取県産業観光米子大博覧会が開催される。博覧会後、二の丸は整備されてテニスコートとなり、コートの西側には西町の武家屋敷遺構である旧小原家長屋門（註 2）が昭和 28 年(1953)に西町から移設され、米子市立山陰歴史館として昭和 59 年(1984)まで活用されていた。

現況では、二の丸の二段の郭のうち、上段の御殿跡の一部は削平され、下段の郭は埋められて段差を無くしテニスコートとなっている。埋立て部分は、旧石垣の上部に谷積石垣を乗せ擦り付けられている。建物跡ははっきりしないが、御殿井戸が残る。高石垣と枡形、虎口は良好に残存している。

（註 1）　米城焼

島根県出雲市杵築町から移ってきた板垣辰三郎により、明治 39 年(1906)に枡形および表中御門附近に開かれた陶器窯である。板垣氏は号を「雲道」とし、茶器、茶碗などのほか、陶彫に熱意を燃やし、観音、羅漢像などを盛んに制作した。彼は後藤氏、稲田氏等の保護を得、明治 45 年(1912)に全国特産品博覧会が開催された時には、関係者への記念品として米城焼の茶碗が配られた。

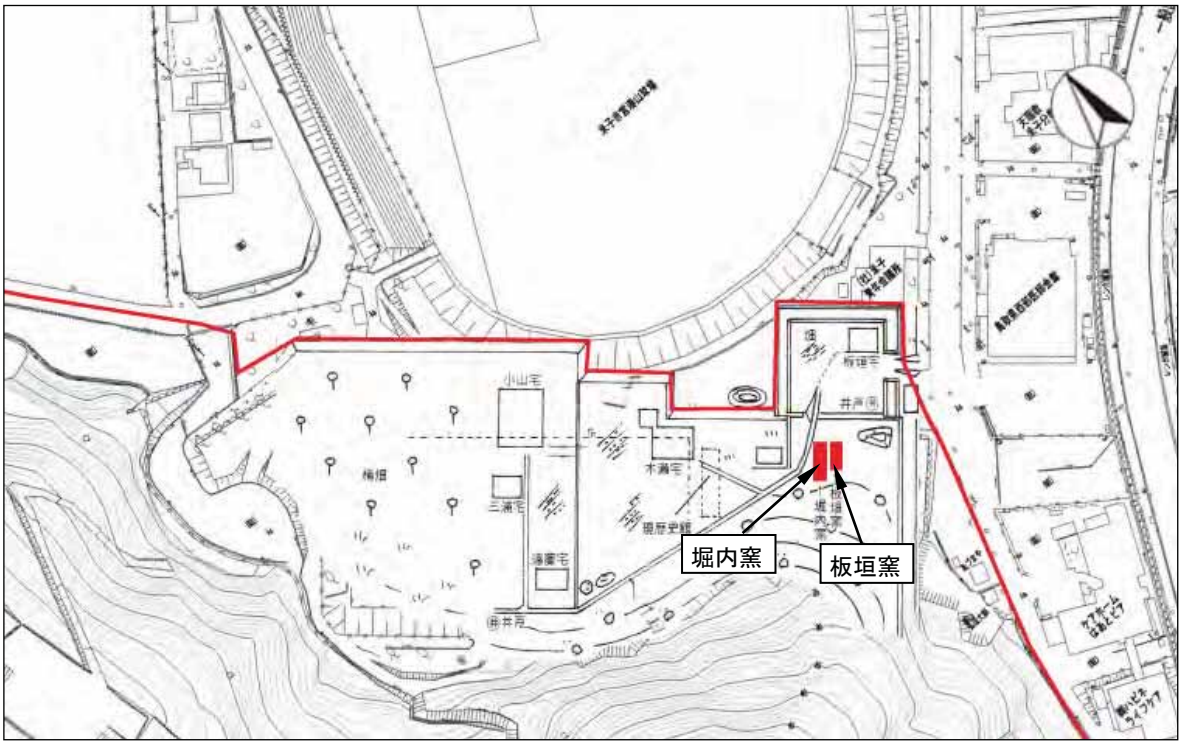
その後、昭和 4 年(1929)からは、出雲布志名の永保山窯二代目の堀内常市（陶山）が米城焼を受け継ぎ、枡形から上がった表中御門の左側に窯場を作った。

陶土は主に城山の土を使用していたようである。窯は一度に茶碗 50 個位が入る小窯で、燃料には熱効率のよい赤松割木を使用していた。この燃料にも城山の木が使用されていたようである。『米子工芸会』№3（1988.8.20 発行）の「幻の米城焼」には昭和 8 年(1933)頃まで二の丸に住んでいた木瀬秀兮氏による「米子城址中御門附近見取図」が掲載されている。これによれば、昭和初期の段階で枡形内に民家が 1 軒と畑、井戸、表中御門付近に米城焼の窯が 2 基、二の丸に民家が 4 軒描かれている。

その後米城焼は、昭和 20 年(1945)、強制疎開により閉窯する。

米城焼窯位置図

米城焼窯
（『新修米子市史第 13 巻』より転載）



米城焼窯拡大位置図　　（「米子城跡中御門附近見取図」『米子工芸会』NO.3 を改変）

(註 2)　旧小原家長屋門（米子市指定有形文化財）

江戸中期、西町の小原家（米子荒尾氏の家臣 120 石取）の長屋門として、7 代乙五郎が 1810 年頃に西町に建築するが、分不相応として閉門されたといわれている。文政 2 年(1819)、8 代秀蔵の時、閉門が解除される。

昭和 28 年(1953)、13 代小原尚作氏から米子市が寄付を受け、西町から米子城二の丸の現在地に移築され、米子市立山陰歴史館として開館する。

昭和 59 年(1984)、米子市立山陰歴史館を旧米子市庁舎（旧館）に移転し、以降長屋門は閉館される。昭和 52 年(1977)4 月 1 日、米子市文化財保護条例に基づき、有形文化財建造物に指定。向かって右側に 1 室、左側に 2 室、屋根裏に中 2 階。門扉は鉄金具打付けの開き扉、左右の部屋の窓は出窓造り。米子に残る唯一の武家屋敷遺構である。

西町小原家長屋門（昭和 20 年代撮影）
（『米子市史第 13 巻』　資料編写真より）

・構造形式：木造平屋、入母屋造、桟瓦葺、
　　桁行 20.38m、梁間 4.16m

・規　　模：平面積 80.131 ㎡　屋根面積 148.980 ㎡

（４）三の丸、内堀の変遷

明治 12 年(1879)、三の丸の現湊山球場地にあった米蔵を利用して鳥取監獄米子分監が置かれた。また、明治 29 年(1896)には、飯山麓の大手門入口に西伯郡役所が開設される。明治 32 年(1899)、創立当初の県立第二中学校（現米子東高）は、この郡役所の 2 階を借りて 1 年間授業を行った。

内堀の埋め立ては明治 20 年代にはほぼ終了し、水田や荒蕪地となっていた。明治 26 年(1893)の米子町全図（市史 山陰歴史館所蔵）を見ると、既に大半が埋め立てられていることがわかる。

その後、米子分監は上後藤の後藤家所有地に移転し、跡地を譲り受けた後藤家が整備して、大正 12 年(1923)4 月に運動場（後藤グランド）を設置した（註 1)。

大正 15 年(1926)6 月 30 日、郡役所は廃止される。以後、牧場（註 2)、製鋼所（註 3)、醸造工場（註 4)、冷蔵会社（註 5)、図書館（註 6)、病院（註 7）などが置かれ、そのほか稲田養兎養鶏場、井上養鶏場等もあった。

昭和 25 年(1950)には三の丸、二の丸を第 1 会場として「鳥取県産業観光米子大博覧会」が開催される（会期：昭和 25 年 4 月 5 日～5 月 15 日　鳥取県と米子市の共催）

旧郡役所の跡は戦後日の丸自動車整備工場となり、現在はホテルとなっている。

昭和 35 年(1960)、国道 9 号が湊山と飯山の間を貫通したことにより、その景観は大きく変化し、現況は、市営湊山球場、鳥取大学医学部附属病院、ホテル、スーパー、ホームセンター等となっている。内堀は埋め立てられ道路となっているが、経路の外形を残している。開発に伴う久米第 1 遺跡の発掘調査では石垣の一部等、遺跡の残存も確認されている。

西伯郡役所（『米子市史第 13 巻』　資料編写真より）

米子町全図(部分)（米子市立山陰歴史館蔵）

愛宕町から見た大工町方面の外堀
（明治終わり頃：『米子市史第 13 巻』　資料編写真より）

（註 1）後藤グランド（湊山球場）

大手門西の現湊山球場には、明治期には米蔵を利用した鳥取監獄米子分監が広い面積を占めていた。

大正 12 年(1923)にこの監獄が住吉地区の後藤家所有地に移転した際、跡地を内町後藤家が譲り受け、当初畑として開墾しようとしたが、瓦礫が多く埋め込まれていたのでこれを中止し、運動広場（後藤グランド）を開設した。

米子大博覧会の様子（『米子市史第 13 巻』　資料編写真より）

昭和 25 年(1950)には、鳥取県と米子市の共催で「鳥取県産業観光米子大博覧会」（会期：昭和 25 年 4 月 5 日～5 月 15 日）が開催された。米子地方の産業・文化の振興、国立公園大山を中心とする観光資源の紹介を目的としたもので第 1 会場は湊山公園一帯、第 2 会場は錦公園があてられた。展示催物の主な施設は、全国の重要特産物を展示する府県館、本県の産業を紹介する産業館、野球を主としたスポーツ館、美術館、子ども館等であった。二の丸から三の丸にかけて設営された大滑り台は大好評であった。

博覧会後、グランドは本格的な野球場として整備され、昭和 28 年(1953)に「湊山球場」第 1 期工事が完成、6 月 1 日に球場開きが行われた。

（註 2）原牧場

枡形の向かい側には明治 20 年(1887)代半ばから原文六が始めた牧場があり、エーアシャー種本位牧場と称した。これが米子における牛乳業の最初であり、息子の原弘業はさらに経営を拡大し、牛乳神社まで造ったが、後継者がなく、戦争により牧草が不足し、昭和 15 年(1940)に閉鎖した。

（註 3）米子製鋼所

明治 38 年(1905)、郡役所の東に坂口平兵衛氏により合資会社米子製鋼所が設立される。明治末期から大正初期にかけて、坩堝製工具網を初め銑鉄・錬鉄を海軍工廠などに納入し、高品質の評価を得る。戦後は山陰金属工業工場となった。以前はここまで米子駅からの鉄道引込み線が敷かれていた。

（註 4）醸造工場

西裏御門の現鳥取大学医学部附属病院のところには明治 2 年(1869)設立の坂口氏の醸造工場があり、明治 31 年(1898)には、規模を拡大し新たに酒造部を始めたが、大正期には酒造部は営業を廃止した。

坂口合名会社醸造所
（明治終わり頃：『米子市史第 13 巻』　資料編写真より）

坂口氏の醸造工場西側には稲田氏の醸造所があった。この醸造所は紺屋町から移転した工場で、明治 24 年(1891)には山陰で初めてのビールの醸造がはじめられた。また、明治 40 年(1907)皇太子行啓の折に随行した東郷元帥の命名による「水雷」を醸造していた。醤油銘柄は「花の露」であったが、後年は酒造のみに営業を絞った。

（註 5）冷蔵会社

明治 32 年(1899)5 月、湊山山麓の海岸側空地（稲田酒造の西）に日本最初の製氷会社といわれた日本冷蔵商会が開業した。創業者は中原孝太（1870-1943、東伯郡橋津村(現・湯梨浜町)出身）であった。外国人技師を雇って製氷、冷蔵、魚肉貯蔵、寒天製造などを行った。後には、凍り豆腐の製造も試みた。これらの工場は湊山からの湧水を利用していたようである。

（註 6）米子図書館・米子児童図書館、法勝寺電車

博覧会の時の美術館の跡（現在の西部医師会館のところ）は県立図書館となり、昭和 54 年(1979)まで続いた。また、昭和 39 年(1964)には湊山球場に隣接して米子児童図書館が建設された。

児童図書館横には、昭和 48 年(1973)に法勝寺電車の客車が置かれ、読書室として活用された。この車両は廃線後、県立博物館に移設される際に米子市が歴史資料として買取ったものであり、昭和 61 年(1986)に錦公園に移設、平成 3 年(1991)に元町パティオ（広場）に移設された。その後、平成 22 年(2010)に米子市指定文化財、平成 23 年(2011)3 月 22 日には鳥取県有形文化財に指定された。

（註 7）鳥取大学医学部附属病院

明治 26 年(1893)4 月、現在の鳥取大学医学部附属病院の敷地に鳥取県立病院米子支部病院が創設された。その後、明治 32 年(1899)に西伯郡立病院、さらに大正 11 年(1922)6 月に財団法人米子病院と変遷している。

鳥取大学医学部附属病院は、米子病院の後を継ぎ、第二次大戦末期、軍医を養成するために、昭和 20 年(1945)3 月米子医学専門学校附属病院として設立された。その後、昭和 23 年(1948)医科大学設置、昭和 26 年(1951)3 月鳥取大学医学部附属病院として発足、さらに建物は昭和 53 年(1978)に増築を行っている。

昭和 62 年(1987)、病院の拡充計画のため、稲田酒造は夜見町に移転、平成 2 年(1990)には新病棟が竣工、それに伴う久米第 1 跡の事前の発掘調査が行われた。これは本格的な米子城跡の発掘調査のきっかけとなり、その後平成 7 年(1995)には新外来・中央診療棟の改築工事に伴う米子城跡 1 遺跡の発掘調査が行われた。

原牧場（『米子市史第 13 巻』資料編写真より）

牛乳手形（『米子商業史』より）

稲田酒造広告（『米子商業史』より）

湊山球場で開催された日本体操祭の民謡おどり
（『米子四十周年史』より）

湊山球場で開催された盆踊り
（昭和 30～40 年代）

（５）湊山公園（錦公園）の変遷

吉川氏時代から中村氏時代の西町の海岸線は、ほぼ現在残る潮止め松の線であったと思われる。西町海岸の埋立地を拡張整備して公園とする工事は、明治 37 年(1904)から西伯郡の事業として着手された。米子町管理の既設 238 坪余を 3,170 坪余に拡張するもので、工費は 9,840 円を要し、昭和 39 年(1906)末に錦公園が竣工された。

公園入口正面には、明治 39 年(1906)に工費 3,288 円をもって、皇太子の山陰行啓の宿所として鳳翔閣が建設された。建坪 54 坪余の純日本建築であった。鳳翔閣の南側に同年、工費 6,114 円をもって西伯郡公会堂が建設された。建坪約 140 坪で、昭和の戦後まで米子市が利用した。鳳翔閣は大正・昭和戦前までは市の迎賓等の公用によく利用され、大正 14～15 年(1925～1926)にわたって屋根を銅板葺とし、昭和 8 年(1933)には昭和天皇の弟の澄宮崇仁親王（三笠宮崇仁親王）が宿泊された。戦中から戦後にかけて雨漏り等甚だしくなり、ついに昭和 45 年(1970)に取り壊された。一方公園の拡張も大正末頃に埋め立てその他によって 1,500 坪余拡張され、公会堂の南には市制記念の噴水池が昭和 3 年（1928）に完成し、園内には、諸種の記念植樹をはじめとして、桜・松・つつじ・柳等数千本が植樹され照明灯・花壇の新設も行われた。

公園区域を湊山一帯に拡大しようとするに至ったのは、昭和 8 年(1933)、坂口氏が湊山約 34,000 坪を市に寄付した経緯からであった。公園が湊山一帯を含め都市公園計画法によって湊山公園と称することになったのは昭和 26 年(1951)からで、野球場・庭球場も整備された。公園をさらに拡大して公共施設等を造成するため、昭和 46 年(1971)度から 3 ヶ年計画で、清洞寺岩沖から出山を結ぶ錦海 120,500 ㎡余の埋立地を造成した（用土は崎津干拓地付近の中海から採取、船で埋立地沖のタメマスに運び、サンドポンプで護岸堤内に注ぎ込んだ)。造成地は鳥取大学医学部への売却、護岸、道路、水路等を除いて約 56,000 ㎡を新しい公園地、残りは昭和 50 年(1975)以後次々と市事業として桜の園、日本庭園等の建設をすすめて現在に至り、公園全体の広さは、城山を含めて 28.5ha に及んでいる。

錦公園の造成（明治中期）

鳳翔閣（右）と公会堂（左）

錦公園の花見（昭和 43 年頃）

錦公園のボート乗り場（昭和 46 年）

湊山公園「日本庭園」

湊山公園「護岸遊歩道」

湊山公園「遊具広場」

米子港（大正時代）

米子港（昭和初期）

城山から見た米子港（昭和初期）

（６）深浦の変遷

軍港の色彩が強かった深浦も、明治以後は貨物船・客船の出入りが次第に多くなり、商港の性格をもつようになった。

明治後半に米子の商工業者による深浦倉庫合資会社が設立され、石炭、塩、石材、瓦、穀物、青果等を取り扱った。別に米子海陸運送株式会社も運営していた。海岸は深浦神社の前あたりまで迫っていて、桟橋、荷揚げ場等があった。

明治の終わりには港の浚渫も行われたので、大型船の出入りが可能になり、深浦倉庫会社・米子海陸運送会社が海岸に倉庫も建てて活発に営業し、石炭・石材・瓦・穀物・青果等の取り扱いが増加していった。

大正時代以降、海岸は若干埋め立てられ、新加茂川口近くには造船所も設立された。昭和 11 年(1936)、石黒造船所を東洋汽船（東京）が買収、社名を米子造船所として発足、最大 500ｔくらいの鉄鋼船を建造していたが、戦争の激化と共に海軍の管理下で 200ｔ程度の木造駆潜艇や上陸用舟艇の建造にあたっていた。その後、終戦と共に造船業界が恐慌に見舞われ用地処分となった。

深浦（御船手）郭には明治 19 年(1886)コレラの流行に対し、城南病院が建設される。その後、伝染病隔離施設は昭和 25 年(1950)鳥取大学医学部に貸与される。その跡地には昭和 42 年(1967)に民間施設としてＹＳＰが開業した。ＹＳＰとは「米子・スケート・プール」の略で、夏は屋内プール、冬はスケート場として市民の間に人気であった。現在はスケート・プール共に中止となり、サッカー練習場などのスポーツクラブとなっている。

また、建設省は昭和 33 年(1958)から道路整備 5 か年計画の一環として、主要道路の改良を完成させる方針を決定し、国道 9 号は幅員 8m（市街内は 15～20m）主としてコンクリート舗装道路とする計画のもとに湊山と飯山の間を広げて貫き、深浦をまたぐ深浦大橋を架設する大改修を行った。

その結果、昭和 34 年(1959)4 月に、長さ 65m、幅員 13ｍのランガート工法による鋼構橋（深浦大橋）が完成し、国道 9 号は中心市街地を貫いた。

深浦から飯山を望む（大正時代）

陰田（現・錦海団地）付近の中海
（大正時代）

安来方面から深浦を望む（昭和 20 年頃）

ＹＳＰプール

国道 9 号開削前の米子城跡
（南を望む・昭和 31 年）

湊山公園の埋め立てが進む前の米子城跡
（西を臨む・昭和 31 年）

国道 9 号工事中の深浦（昭和 33 年頃）

国道 9 号開削工事
（深浦側から米子図書館を望む・昭和 33 年頃）

深浦橋

深浦の現状

（７）出山の変遷

明治期になり、出山も坂口氏の所有となる。その後、出山麓には海水浴場やローラースケート場等が開設された。出山海水浴場は中海の出山麓に位置し、昭和 26 年(1951)7 月、都市計画湊山公園の一部として整備、失業対策事業として行った。海岸コンクリート岸壁を作り、50mコースの飛込み台等が設けられ、学生、市民の水泳場として利用された。

その後、昭和 56 年(1981)～昭和 60 年(1985)度にかけて、出山頂上に展望台や休憩所を設け、散策園路の整備も行った。

出山水泳場（昭和 25 年頃）
の様子がわかる説明板

出山（とりでの山）の散策路

（８）飯山の変遷

飯山には戦時中に、高射砲陣地が築かれていた。昭和 35 年(1960)に国道 9 号が湊山と飯山の間に開通すると鞍部の景観は大きく変わり、昭和 41 年(1966)には山頂に英霊塔が建設される。

市民からの要望により、昭和 39 年(1964)に米子市英霊塔建設推進委員会準備会が発足、昭和 40 年(1965)、建設期成会が設立された。12 月、坂口氏の協力により飯山に建設が決定、昭和 41 年(1966)陸上自衛隊第 13 師団第 8 普通科連隊により、参道新設工事が開始され、10 月に完成したものである。飯山の麓には蛇塚とよばれる小祠があり、石蛇が数個供えられている。

英霊塔

蛇塚

米子城跡に係る主な工事等一覧表（米子市事務報告、周年史から抜粋）

年　度	工事名・事業名等	工事費・事業費(円)	概　　要	備　考
昭和 22 年度	後藤グランド買収委員選任		土谷栄一、栗林力吉、船越晋、大谷虎三、由井敏雄、山崎健二を後藤グランド買収委員に選任し、市議会に特別委員会を設置	
昭和 25 年度	市営野球場と庭球コート新設	失業対策事業費 840 万円に市費 359 万円を加え実施	昭和 25 年度～昭和 30 年度	
昭和 26 年度	出山水泳場整備	資材費 230.000		
	自動車廻遊道路築造着手			

年　度	工事名・事業名等	工事費・事業費(円)	概　　要	備　考
昭和 27 年度	湊山公園庭球場整備工事	400,012	本部席 1 か所コンクリート階段 2 か所　フェンス 252.5m、木造便所 4.5 坪、掲示板 1 個、植栽	
昭和 28 年度	湊山公園整備事業（市営湊山球場内）	400,000	内野フェンス設置。湊山球場第 1 期工事が完成、球場開きを行う（昭和 28 年 6 月 1 日）	
昭和 29 年度	湊山運動公園野球場整備	5,136,610		
昭和 32～34 年度	国道 9 号改修工事		湊山、飯山間開削、幅員 15mの新道造成、深浦大橋架橋工事	
昭和 39 年度	城山の一部に山崩れのおそれ		城山の一部に山崩れのおそれあり、鳳翔閣に避難所を設置した	
	城山開発と米子市観光総合開発協議会		京都大学名誉教授　関口博士一行が観光診断をおこない城山一帯の見解を述べた	
昭和 44 年度	城山頂上擬木柵築造工事	100,000	擬木柵 19.5m	
昭和 46 年度	米子城築城 500 年記念展		飯山築城 500 年を記念し、12 月 1 日から 12 月 4 日まで米子市公会堂で記念展を開催。	
昭和 47 年度	内膳丸線舗装新設	4,227,706	失業対策事業	
	城山公園線舗装新設	3,111,165	失業対策事業	
昭和 49 年度	城山に寄付の桜の木植樹		愛知県浅野さんら同期 4 人から市役所に吉野桜、銀マサキなど 1,160 本の木が贈られ、東山公園、米子城跡などに植える	
昭和 53 年度	米子市指定文化財に史跡中村一忠墓地付中村一忠主従木像三体指定		感応寺	
	城山に電飾城が初見え（昭和 56 年に復活、以降はなし）する。			
昭和 54 年度	城山公園線	650,000	歩道舗装補修	
昭和 56 年度	湊山公園城山本丸趾東屋舗装修繕工事	189,000	東屋塗装修繕　1 棟　1 式	
	湊山公園庭球場進入路舗装工事	2,290,000	路盤工、表層工	
	湊山公園庭球コート改修工事	2,950,000	コート補修 4 面　2,622 ㎡	
	湊山公園城山石段園路及び枡形舗装工事	1,620,000	舗装工　石段 240 ㎡　広場 375 ㎡ 排水管布設工　26m	
昭和 57 年度	湊山公園テニスコート　南側園路側溝改修及び車止め柵設置工事	361,000	側溝改修工 100m　車止め柵設置　5 基	
	湊山公園城山石段園路舗装工事	1,100,000	園路舗装工　610 ㎡	
	史跡米子城跡石垣整備事業	64,800,000	米子市の史跡に指定されている米子城跡の石垣の破損が著しく(財) 文化財建造物保存技術協会に設計管理を委託し、3 ヶ年の継続事業で石垣の修復工事に着手した。	
	湊山公園整備事業(城山地区) 調査計画委託	2,000,000		
	米子城跡遺構確認調査	268,400		
昭和 59 年度	湊山公園城山区域松くい虫被害木搬出工事	685,000	伐採工及び搬出工　20 本	
	湊山公園城山区域松くい虫被害木撤去工事	480,000	撤去工　1 式	
	米子城跡石垣修復工事が完成。			
昭和 60 年度	湊山公園内出山に展望広場、駐車場が完成する。			
	湊山公園清洞寺跡に女人像を建立			

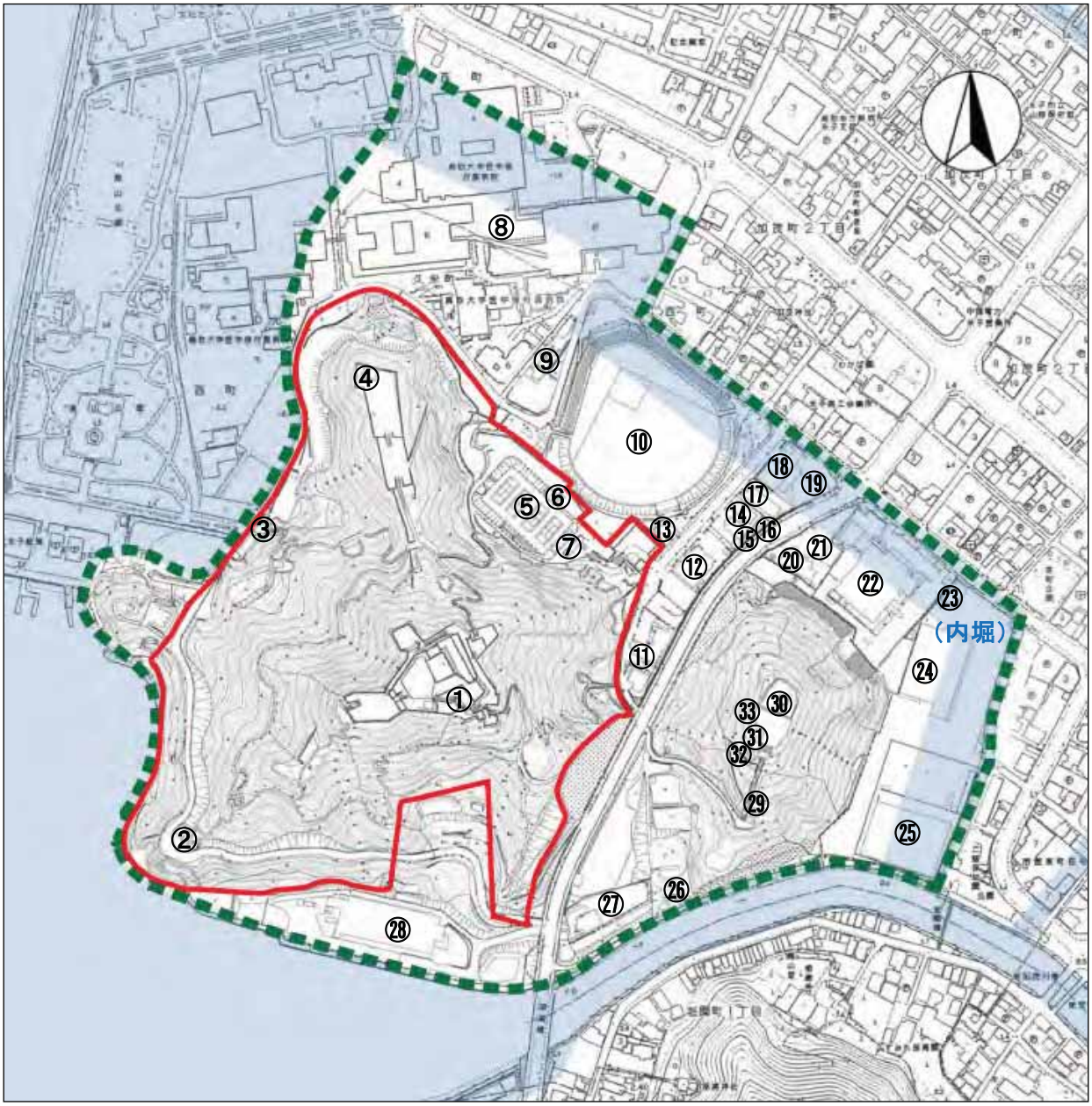
年　度	工事名・事業名等	工事費・事業費(円)	概　　要	備　考
昭和 61 年度	城山の弘法大師の補修が完成			
昭和 62 年度	観光資源開発プロジェクト・チーム		米子城再建について調査研究を行った。	
平成 3 年度	湊山公園環境整備(その 1)工事	525,300	城山の池東屋周辺整備	
平成 3 年度	湊山公園運動施設整備工事	2,678,000	湊山庭球場　観覧席建設工事　更衣室建具取替工事　器具庫屋根ふき替え工事	
	湊山公園施設災害復旧工事	581,950	東屋屋根修繕、　庭球場更衣室修繕	
平成 5 年度	湊山球場防球ネット設置工事	8,343,000	防球ネット設置	
	湊山公園テニス場外柵補修及び土留縁石設置工事	551,050	フェンス設置、土留縁石	
	湊山公園城山の池周辺改修工事	4,431,060	排水工　給水施設工　池改修	
	湊山公園線道路新設改良	2,482,300	排水工　Ｌ＝27.3m　擁壁工　Ｌ＝22.8m	
平成 6 年度	湊山公園野球場バックネット改修工事	1,184,500	バックネット改修	
	湊山公園石垣崩落復旧外工事	1,133,000	石垣復旧、掲示板移設	
	城山案内板設置工事	989,830	案内板　7 基	
	飯山ポンプ施設修繕工事	901,250	ポンプ修繕	
平成 7 年度	湊山公園東屋修繕補修工事	1,244,240	城山城跡東屋、内膳丸東屋外	
平成 8 年度	湊山公園テニスコート駐車場進入路補修工事	803,400	舗装工　Ａ＝189 ㎡	
平成 9 年度	飯山階段補修外工事	1,086,750	土工、園路広場工、雑工	
	飯山園路舗装工事	3,276,000	舗装工　Ｌ＝125.0m、Ｗ＝2.5m～4.0m	
平成 10 年度	飯山園路補修工事	2,180,850	土工、階段工、休憩施設工	
	文化財標柱設置工事	546,000	米子城	
平成 14 年度	史跡米子城跡環境整備事業	3,990,000	雑草、雑木の除去	緊急雇用
平成 15 年度	史跡米子城跡環境整備事業	2,730,000	雑草、雑木の除去	緊急雇用
平成 16 年度	文化財環境美化事業	7,644,000	雑草、雑木、危険木、倒木等の伐採、除去	他施設含む緊急雇用
平成 17 年度	英霊塔あずまや屋根修繕工事	1,291,500	東屋補修工	
	湊山海岸遊歩道手摺補修等工事	2,305,800	横断防止柵設置工　Ｌ＝190.5m、擬木柵撤去工　Ｌ＝189m	
平成 18 年度	湊山庭球場更衣室外施設補修工事	430,500	施設補修工　１式　　遊具補修工　１式	
平成 19 年度	湊山公園城山園路補修工事	525,000	土工、舗装工、階段復旧工他　１式	
平成 21 年度	史跡米子城環境整備事業	1,050,000	石垣除草、竹木伐採 緊急雇用創出事業活用	100/100 補助金
	史跡環境整備事業	3,045,000	石垣除草、竹木伐採 緊急雇用創出事業活用	100/100 補助金
平成 22 年度	湊山公園雪害倒木撤去業務委託（城山東側）	1,102,500	倒木撤去業務	
	湊山公園雪害倒木撤去業務委託（登山道）	1,092,000	倒木撤去業務	
	湊山公園雪害倒木撤去業務委託（彫刻ロード）	6,594,000	倒木撤去業務	
	湊山公園雪害倒木撤去業務委託（トリムコース）	4,978,050	倒木撤去業務	
平成 23 年度	史跡米子城環境整備事業	2,785,650	石垣除草、竹木伐採 緊急雇用創出事業活用	100/100 補助金

第３節　米子城跡の現況調査

１米子城跡内の現況施設の概要

（１）既存施設等一覧

所在地区分		施　設　名　称	構　造　等	規　模	管理者等	備　考
本　丸	①	東屋	鉄骨造	平屋建	米子市維持管理課	指定地内
	②	中海展望所東屋	鉄骨造	平屋建	米子市維持管理課	指定地内
	③	中海側登り口東屋・池	鉄骨造等	平屋建	米子市維持管理課	指定地内
内膳丸	④	東屋	鉄筋コンクリート	平屋建	米子市維持管理課	指定地内
二の丸	⑤	湊山庭球場	コート、用具庫	5,707 ㎡	米子市維持管理課	指定地内
	⑥	公衆トイレ	鉄骨造	平屋建	米子市維持管理課	指定地内
	⑦	旧小原家長屋門 （米子市指定文化財）	木造	平屋建	米子市文化課	指定地内
三の丸	⑧	鳥取大学医学部附属病院	鉄筋コンクリート	9 階建	鳥取大学	指定地外
	⑨	住宅地	木造等	2 階建		指定地外
	⑩	湊山球場	グランド・スタンド	23,971 ㎡	米子市体育課	指定地外
	⑪	介護福祉施設	鉄筋コンクリート	3 階建	事業者	指定地外
	⑫	鳥取県西部医師会館	鉄筋コンクリート	3 階建	鳥取県西部医師会	指定地外
	⑬	米子青年会議所	木造	平屋建	米子青年会議所	指定地外
	⑭	宗教施設	木造	2 階建	事業者	指定地外
	⑮	事務所	木造	2 階建	事業者	指定地外
	⑯	住宅	木造	2 階建		指定地外
	⑰	マンション	鉄筋コンクリート	5 階建	事業者	指定地外
	⑱	レンタカー	鉄骨造	2 階建	事業者	指定地外
	⑲	ガソリンスタンド	鉄骨造	平屋建	事業者	指定地外
	⑳	レストラン	レストラン	2 階建	事業者	指定地外
	㉑	自動車ガラス店	鉄骨造	平屋建	事業者	指定地外
	㉒	ホテル	鉄筋コンクリート	9 階建	事業者	指定地外
	㉓	レストラン	鉄骨造	平屋建	事業者	指定地外
	㉔	スーパーマーケット	鉄骨造	平屋建	事業者	指定地外
	㉕	ホームセンター	鉄骨造	平屋建	事業者	指定地外
深　浦	㉖	東屋	鉄骨造	平屋建	米子市維持管理課	指定地外
	㉗	専門学校	鉄筋コンクリート	3 階建	事業者	指定地外
	㉘	スポーツ施設	鉄骨造	2 階建	事業者	指定地外
飯　山	㉙	電波塔	鉄骨造			指定地外
	㉚	英霊塔	鉄筋コンクリート			指定地外
	㉛	東屋	鉄骨造、ﾚﾝｶﾞﾌﾞﾛｯｸ	平屋建		指定地外
	㉜	公衆トイレ	ｺﾝｸﾘｰﾄﾌﾞﾛｯｸ積み	平屋建		指定地外
	㉝	水飲み	コンクリート			指定地外
城山全域		城山大師	石仏・お堂（木造）			指定地内
		標柱			米子市維持管理課、文化課、観光課	指定地内
		説明板			米子市維持管理課、文化課、観光課	指定地内
		ベンチ類			米子市維持管理課、文化課、観光課	指定地内



米子城跡内の主な現況施設等分布図

（番号は既存施設等一覧及び写真番号と対応）

凡　例

- 計画対象範囲
- 史跡指定範囲
- 海域及び堀

本　丸

天守東屋（中に看板と説明板を設置している）（①）

天守　ベンチ

看板①「城山周辺地図」

看板②「県西部広域地図」

説明板「米子城跡」

中海展望所　東屋・ベンチ（②）

中海側登り口

東屋・池（③）

内膳丸

東屋・ベンチ（④）

内膳丸　ベンチ

東屋プレート

二の丸

湊山庭球場（⑤）

公衆トイレ（⑥）

旧小原家長屋門（⑦）

三の丸

鳥取大学医学部附属病院（⑧）

住宅地（⑨）

湊山球場（⑩）

介護福祉施設（⑪）

鳥取県西部医師会館（⑫）

米子青年会議所（⑬）

宗教施設（⑭）

事務所（⑮）

住宅（⑯）

マンション（⑰）

レンタカー（⑱）

ガソリンスタンド（⑲）

レストラン（⑳）

自動車ガラス店（㉑）

ホテル（㉒）

レストラン（㉓）

スーパーマーケット（㉔）

ホームセンター（㉕）

深　浦

東屋（㉖）

専門学校（㉗）

スポーツ施設（㉘）

飯　山

電波塔（㉙）

英霊塔（㉚）

東屋（㉛）

公衆トイレ（㉜）

水飲み（㉝）

飯山　ベンチ

城山全域

【標柱：郭説明標柱】

水手御門跡

内膳丸

遠見櫓跡

番所跡

鉄御門跡

二の丸跡

御殿御用井戸跡

裏御門跡

枡形

【標柱：道標】

「頂上登り口」

「城山登り口」

「降り口・頂上」

「中海展望所/内膳丸跡/降り口」

「降り口　内膳丸跡・9 号線側」

「本丸跡/二の丸跡/枡形
/頂上まで約 8 分」

「内膳丸跡・頂上」

「頂上内膳丸跡登り口」

「本丸跡中海展望所」

「内膳丸跡・頂上」
「本丸跡/内膳丸跡/二の丸跡」

「城山頂上」
「中海展望所』

「中海展望所」

「降り口」
「天守閣跡/内膳丸跡/二の丸跡」

「テニスコート枡形門」

「天守閣跡/中海展望所/降り口」

【史跡名称碑・説明板・案内図】

「国指定史跡米子城跡」
「湊山公園案内図」

「国指定史跡米子城跡」

「湊山の植物と野鳥」

「旧小原家長屋門」

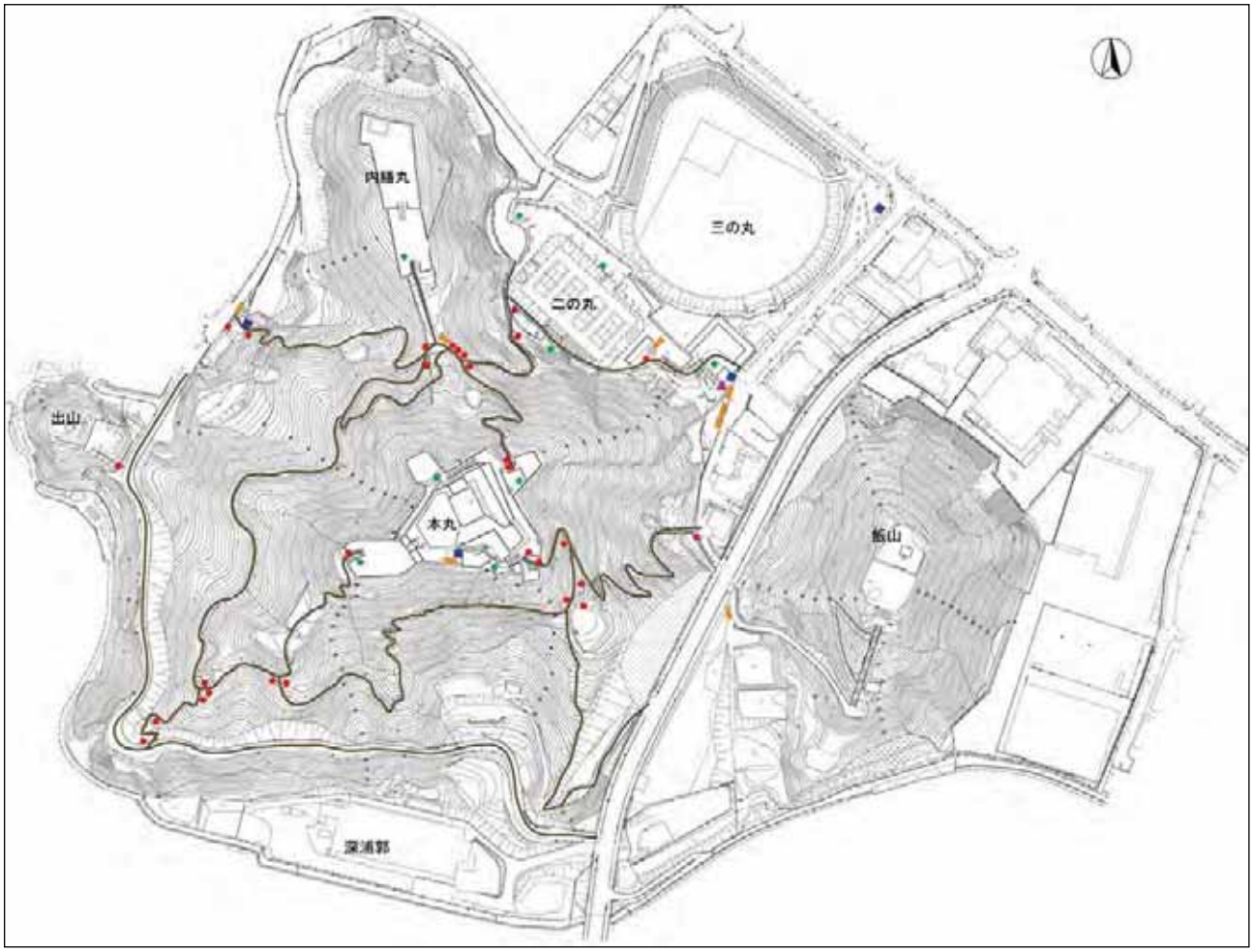
「城山大師」

「石仏めぐりのコース」

「湊山公園案内図」

「米子城の沿革」

「柳生奮戦の地と飯山城跡」



サイン施設位置及び園路ルート図

■ ：案内図
▬ ：説明板
▲ ：史跡名称碑
● ：郭説明標柱
● ：道標
— ：園路

（２）城山大師

湊山内には四国八十八箇所の石仏が設置されている。この石仏群は、大正 14 年(1925)4 月の創始で、全て来待石製である。安達弁市、三角瀧三郎、中田倉太郎、安部常太郎、小島辰二郎氏らが発起人となり、当時の城山の所有者は設置場所を無償で提供した。願主 469 名、浄財数千円をもって霊場が完成、9 月 22 日に入魂式を行った。

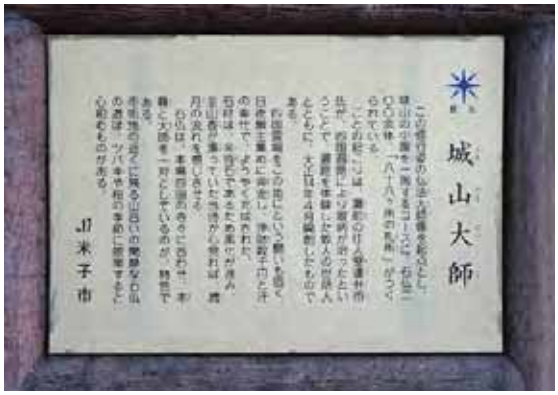
昭和 10 年(1935)、本丸及び内膳丸登山路の改修時に石仏のうち、公園施設上の支障となる 45 堂を深浦方面及び西方山腹に移転した。

昭和 61 年(1986)4 月、城山大師補強修理工事世話人会が結成され、修行大師像倒壊防止の童像 2 体、香炉を設置し、八十八箇所の石仏の由来を示す立て札も世話人会の手により立てられた。

区分	番号	寺　　名	本　　尊	宗　　派
阿波の札所	1	竺和山霊山寺	釈迦如来	高野山真言宗
	2	日照山極楽寺	阿弥陀如来	高野山真言宗
	3	亀光山金泉寺	釈迦如来	高野山真言宗
	4	黒厳山大日寺	大日如来	高野山真言宗
	5	無尽山地蔵寺	勝軍地蔵菩薩	真言宗御室派
	6	温泉山安楽寺	薬師如来	高野山真言宗
	7	光明山十楽寺	阿弥陀如来	高野山真言宗
	8	普明山熊谷寺	千手観世音菩薩	高野山真言宗
	9	正覚山法輪寺	釈迦如来（涅槃）	高野山真言宗
	10	得度山切幡寺	千手観音菩薩	高野山真言宗
	11	金剛山藤井寺	薬師如来	臨済宗妙心寺派
	12	摩盧山焼山寺	虚空蔵菩薩	高野山真言宗
	13	大栗山大日寺	十一面観世音菩薩	真言宗大覚寺派
	14	盛寿山常楽寺	弥勒菩薩	高野山真言宗
	15	薬王山國分寺	薬師如来	曹洞宗
	16	光輝山観音寺	千手観世音菩薩	高野山真言宗
	17	瑠璃山井戸寺（元妙照寺）	七仏薬師如来	真言宗善通寺派
	18	母養山恩山寺	薬師如来	高野山真言宗
	19	橋池山立江寺	延命地蔵菩薩	高野山真言宗
	20	霊鷲山鶴林寺	勝軍地蔵菩薩	高野山真言宗
	21	舎心山太龍寺	虚空蔵菩薩	高野山真言宗
	22	白水山平等寺	薬師如来	高野山真言宗
	23	医王山薬王寺	薬師如来	高野山真言宗
土佐の札所	24	室戸山最御崎寺 ﾎﾂﾐｻｷｼﾞ	虚空蔵菩薩	真言宗豊山派
	25	宝珠山津照寺 ｼﾝｼｮｳｼﾞ	地蔵菩薩	真言宗豊山派
	26	龍頭山金剛頂寺（西寺）	薬師如来	真言宗豊山派
	27	竹林山神峰寺	十一面観世音菩薩	真言宗豊山派
	28	法界山大日寺	大日如来	真言宗智山派
	29	魔尼山国分寺	千手観世音菩薩	真言宗智山派
	30	百々山善楽寺	阿弥陀如来	真言宗豊山派
	31	五台山竹林寺	文殊菩薩	真言宗智山派
	32	八葉山禅師峰寺	十一面観世音菩薩	真言宗豊山派
	33	高福山雪渓寺	薬師如来	臨済宗妙心寺派
	34	本尾山種間寺	薬師如来	真言宗豊山派
	35	医王山清瀧寺	薬師如来	真言宗豊山派
	36	独鈷山青龍寺	波切不動明王	真言宗豊山派
	37	藤井山岩本寺	不動明王・阿弥陀如来 薬師如来・観世音菩薩・地蔵菩薩	真言宗智山派
	38	蹉跎山金剛福寺	三面千手観世音菩薩	真言宗豊山派
	39	赤亀山延光寺	薬師如来	真言宗智山派

区分	番号	寺　　名	本　　尊	宗　　派
伊予の札所	40	平城山観自在寺	薬師如来	真言宗大覚寺派
	41	稲荷山竜光寺	十一面観世音菩薩	真言宗御室派
	42	一か山佛木寺	大日如来	真言宗御室派
	43	源光山明石寺	千手観世音菩薩	天台寺門宗
	44	菅生寺大宝寺	十一面観世音菩薩	真言宗豊山派
	45	海岸山岩屋寺	不動明王	真言宗豊山派
	46	医王山浄瑠璃寺	薬師如来	真言宗豊山派
	47	熊野山八坂寺	阿弥陀如来	真言宗醍醐派
	48	清滝山西林寺	十一面観世音菩薩	真言宗豊山派
	49	西林山浄土寺	釈迦如来（涅槃）	真言宗豊山派
	50	東山繁多寺	薬師如来	真言宗豊山派
	51	熊野山石手寺	薬師如来	真言宗豊山派
	52	龍雲山太山寺	十一面観世音菩薩	真言宗智山派
	53	須賀山圓明寺	阿弥陀如来	真言宗智山派
	54	近見山延命寺	不動明王	真言宗豊山派
	55	別宮山南光坊（光明寺）	大通智勝如来	真言宗御室派
	56	金輪山泰山寺	地蔵菩薩	真言宗醍醐派
	57	府頭山栄福寺	阿弥陀如来	高野山真言宗
	58	作礼山仙遊寺	千手観世音菩薩	高野山真言宗
	59	金光山国分寺	薬師如来	真言律宗
	60	石鉄山横峯寺	大日如来	真言宗御室派
	61	梅檀山香園寺	大日如来	真言宗御室派
	62	天養山寶壽寺	十一面観世音菩薩	高野山真言宗
	63	密教山吉祥寺	毘沙門天	真言宗東寺派
	64	石鉄山前神寺	阿弥陀如来	真言宗石鉄派
	65	由霊山三角寺	十一面観世音菩薩	高野山真言宗
讃岐の札所	66	巨鼇山雲辺寺	千手観世音菩薩	真言宗御室派
	67	小松尾山大興寺（小松尾寺）	薬師如来	真言宗善通寺派
	68	七宝山神恵院（琴弾八幡宮）	阿弥陀如来	真言宗大覚寺派
	69	七宝山観音寺	聖観世音菩薩	真言宗大覚寺派
	70	七宝山本山寺	馬頭観世音菩薩	高野山真言宗
	71	剣五山弥谷寺	千手観世音菩薩	真言宗善通寺派
	72	我拝師山曼荼羅寺	大日如来	真言宗善通寺派
	73	我拝師山出釈迦寺	釈迦如来（涅槃）	真言宗御室派
	74	医王山甲山寺	薬師如来	真言宗善通寺派
	75	五岳山善通寺	薬師如来	真言宗善通寺派総本山
	76	鶏足山金倉寺	薬師如来	天台寺門宗
	77	桑多山道隆寺	薬師如来	真言宗醍醐派
	78	仏光山郷照寺	阿弥陀如来	時宗遊行派・真言宗
	79	金華山高照院（天皇寺）	十一面観世音菩薩	真言宗御室派
	80	白牛山国分寺	十一面観世音菩薩	真言宗御室派
	81	綾松山白峰寺	千手観世音菩薩	真言宗御室派
	82	青峰寺根香寺	千手観世音菩薩	天台宗単立本山
	83	神毫山一宮寺	聖観世音菩薩	真言宗御室派
	84	南面山屋島寺	十一面観世音菩薩	真言宗御室派
	85	五剣山八栗寺	聖観世音菩薩	真言宗大覚寺派
	86	補陀洛山志度寺	十一面千手観世音菩薩	真言宗善通寺派
	87	補陀洛山長尾寺	聖観世音菩薩	天台宗
	88	医王山大窪寺	薬師如来	真言宗大覚寺派
番外		奥の院月頂山慈眼寺	十一面観世音菩薩	高野山真言宗
		奥の院金光山仙龍寺	自作弘法大師	真言宗大覚寺派
			南無大師遍照金剛・薬師如来・衛門三郎杖杉庵	
		高野山奥の院	弘法大師	
		小豆島第一番洞雲山	毘沙門天尊	真言宗

城山弘法遠景



城山弘法の説明板

城山弘法大師

第１番　竺和山霊山寺

第 15 番　薬王山國分寺

第 17 番　瑠璃山井戸寺

第 19 番　橋池山立江寺

第 20 番　霊鷲山鶴林寺

２景観調査

（１）城跡からの眺望

米子城跡の本丸は、史跡指定の説明(第 4 章 第 2 節)にあるように、東に大山、西に中海、南に中国山地、北に弓ヶ浜と日本海を望む 360 度のパノラマが展開する景勝地である。

さらに山腹の散策路を巡ると、自然林のある風景、石垣のある風景、中海を望む風景等が展開していく。

これまでは市街地にある貴重な自然の保護を目的に、樹木の保全が優先されてきたが、近年は貴重な石垣遺構の保護､眺望の確保の観点から､一部の区域では伐採等の樹木管理を行っている。特に近年は全国各地の史跡や城跡において、石垣等の城郭遺構の保全と景観・眺望の確保の観点から、伐採を含めた樹木の適切な維持管理についての計画が策定されつつある。米子城跡についても同様に貴重な史跡としての城跡と市街地にある自然林としての維持管理計画が必要である。

本丸から南東方向（大山）を望む

本丸から西方向（中海）を望む

本丸から南方向（中国山地）を望む

本丸から北方向（市街地・弓ヶ浜）を望む

本丸から見る夕日

本丸からの夜景

（２）周辺域からの眺望

米子城下からは湊山がランドマークとして、現在も地域の日常生活の中に溶け込んでいる。城下町の構築の際、米子の町は武士、町人、百姓を同心円的な階層分離の構造で計画的に配置している。その中で、中心となる城主の権威を示すためにも、城下からの本丸の眺望が重要であり、外堀に架かる橋や主要な道筋、寺町等、城下の主要な場所からは、必ず湊山山頂にそびえる本丸が見えるように設計されている。

さらに、城山は市街地周縁部、日野川右岸や遠く島根半島からも遠望することができるが、現在は樹木繁茂により、南西側からの本丸石垣の眺望は阻害されている。

賀茂神社付近から米子城跡を望む

国道９号（加茂町）から
米子城跡を望む

西町から米子城跡を望む

寺町（安国寺）から米子城跡を望む

東町から米子城跡を望む

中海から米子城跡を望む

１）米子市立町（鹿島茶舗付近）から

この付近には、西伯耆随一の豪商であった鹿島家がある。鹿島家には、江戸末期の嘉永 5 年(1852)頃に米子城四重櫓の改修工事を藩命により肩代わりした功労に対して下賜された鯱瓦があり、市指定有形文化財となっている。立町で外堀に架かる橋は京橋で、城下の橋の中で最も古い橋である。城主はこの橋から米子城下町に出入りしたといわれている。橋の南側のたもとには木戸があり、木戸番が置かれ、制札場も設けられていた。橋の内町側には、国の重要文化財に指定されている後藤家住宅がある。水運を利用して繁栄した商人の町米子を特徴づけるエリアである。

２）米子市彦名町（水鳥公園）から

米子水鳥公園は、野鳥の生息地を保護するとともに、市民が自然と触れ合う公園として平成 7 年(1995)10 月 22 日に開設された。ここからは中海越しに米子城跡を遠望することができる。付近には粟島があり、江戸時代には城主や家老は御座船を仕立てて、米子城から水路にて粟島にある粟嶋神社に参詣したと記されている。

３）島根県安来市島田町から

隣接する島根県安来市島田町から、中海越しに米子城跡を望むことができる。この付近から吉佐町にかけての海岸線は埋め立てが進み、景観変化が激しい。

４）米子市車尾から

出雲街道は、米子城下の大工町、塩町、茶町、日野町、道笑町、糀町と一直線に北東に進み、博労町で右折し、日野川の西岸に向かう。途中了春寺、勝田神社等米子城に関係が深い寺社が並び、さらに車尾に入ると梅翁寺、貴布祢神社、深田氏庭園などがあり、江戸期から人々の往来する交通の要衝であったことを物語る。出雲街道から城下に向かう人々は湊山にそびえる米子城を遠く望んだものと推測できる。

５）米子市目久美町から

米子駅南側からは、建物が多く眺望はあまり良くない。ビルの隙間や高架等からわずかに本丸石垣を望むことができる。

６）島根県安来市吉佐町から

安来市吉佐町付近から、出雲街道はＪＲ山陰本線と並行して北東に進み、口陰田に入る。ここには鳥取・松江両藩の国境があり、江戸時代には陰田番所があった。現在建物は消滅しているが、「御番所跡」の小字名を残している。この番所は国境警備と西伯耆の警察権を持つ重要な番所であった。この付近も中海の埋め立てが進み、旧来の景観は失われているが、現在は農地が広がっているため、眺望はいい。

７）米子市皆生から

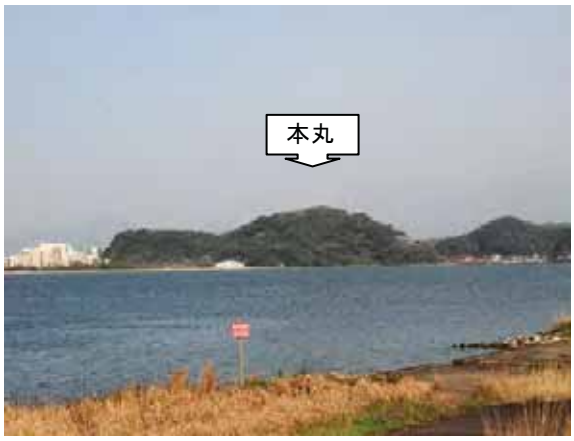
日野川土手からは米子城跡はよく見える。この付近には日野川の渡しがあり皆生、上福原方面へ向かう道が延びている。現在は国道 431 号が開通し、交通量の多い基幹線となっている。

８）米子市西福原から

県道東福原樋口線は通称「自衛隊道路」と呼ばれ、交通量の多い道である。それとほぼ並行して夜見から車尾に通じる因幡道があり、弓浜地方から因幡への主要道であった。西福原には「文政五年正月日　金毘羅大権現」の銘を持つ常夜灯がある。

１）　米子市立町（鹿島茶舗付近）から

２）　米子市彦名町（水鳥公園）から



３）　島根県安来市島田町から

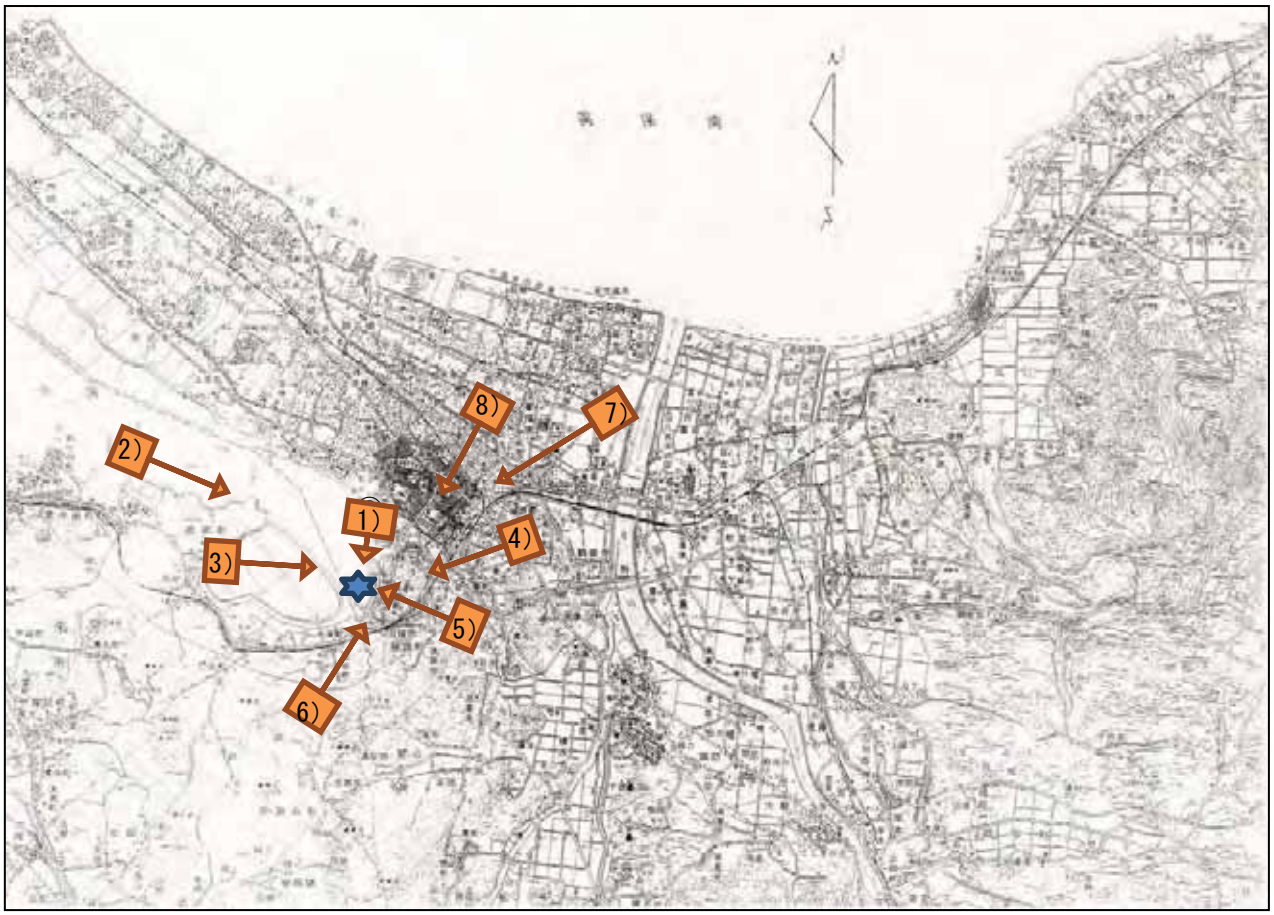
４）　米子市車尾から

５）　米子市目久美町から

６）　島根県安来市吉佐町から

７）　米子市皆生から

８）　米子市西福原から



周辺域からの眺望図（記号は本文・写真と対応）